# 链類种则

號月一十



(看羅奴一月年)號一十倍者二十烯 行發日一月一十年十和級 可整物原數理三第日三月三年三十正大

酒

淸

白鶴を 母 白 白鶴の方に よろこびに添 親 鶴 から \$ 白 緣 つもきらさ 鶴 幹 ٤ へて な 事 は 5 は な 白 極 鶴 h 82 くらしむき 屆 2 B 0 5 け 君 受 ま 5

白鶴禮

恒讃

攝津灘

嘉納合名會社釀



	主催川柳雜誌社	四十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二					麻生路郎氏選	兼題 「墨」 三句	會場 川 柳 會 館 (川柳雜誌社事務所階下ホール) 天王中區上分前二丁目五 上木町四丁目バス伊 天王中區上分前二丁目五 上木町四丁目バス伊				本社十一月句會		
今治支部	十三支部	社大 川阪朝 會報	伯者支部	市岡支部	池		治支	梅田支部	松江支部	伯耆支部	大鐵支部	主催			
夜二十三日	夜二 七三 時日	夜二十二日	夜十七六時日	A SECTION	六一	夜六時半日	-t	豊五 一 時日	夜三 七 時日	夜三七時日	朝三十時日	日時	川柳雜		
支伊 店 豫 相 互	國社町十 裏神三 青津東 年神ノ	カ疊ナ屋メ町	居三鴨美笑	カ屋ナ屋	日四ッ橋南	紅橋電停西 光	IE 10	陽增 居元 翠	公松 會江 堂市	會事務所	天王寺驛	場所	誌社開		
宿帳が、前借		女將汀柳	<b>淚</b> 紅 葉 美笑	度胸、泣聲	制度かほる	1000	拉話、慈善鍋、	南 対 がほる 神 樂	ゴールイン表力	人 翠 雞石選	心	兼	係十一月句		
十錢	十 五 錢	二十 錢	選一十錢	二十錢	選不要	選二十錢	金十錢	美選選 不 要	二人助選出二十銭	選不要	選八十二錢	題會費	會案內		
會場内容明		々題朝爺 星天報質大位 に、 大席に	日余		來會歡迎	更呈生态	場内背明宛	觀菊大句建	子与人 子与人 不 五 馬 上 選 政 記 記 か 別 記 念 大 大 大 の の に 。 に 。 。 に 。 に 。 に 。 に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	前銀日題	錢 二上山吟行	雜			
宵 明	牧人	與三郎		春光	いわを	史呂	宵 明	静波	柳人	美笑	九天	幹事			



EX	2	100	7	3	עווא	u Von	7	/	The	n	75	MA
即詠 神無月 話題	松 茸 狩 の 記	四國遍路(五)	當世不通漫談(四)	劇 やりごころなし	北 澪 莊 窓 話	川柳の夕放送寸感	評選句の創作	須崎豆秋論	明治以後の川柳年表(元)	武玉川二篇研究 (+元)	文苑	川柳雜誌第十二卷 第十一號
汀	帅	酒	梅	金	Щ	五健	西	祁高	西山	至森梅		目
春	樂、桑	井	本	井	本		田	田	島	本本		次
與	夢、葭	大	塵	有爲	雨	東魚、啞三	坤	山雨	0 1	対東の		
史:	乃:	樓:	ift	郎	迷	味	樂	樓:		二魚屋		
史…(黑)	(三)	· (門	· (契	· ( )	迷…(四)	啞三味…(主)	樂…(三1)	···(三人)	(幸)	Ġ		



## バスで拾つた話……平井與三郎…(量) 麙 新 悔に 住めば………高橋かほる…(量) 告は ご 5....平井 走る..... 濱田久米雄…(云) 春光…(云) 歡 JII 椽 び 柳 に 立. は社 續 5 交 て……平井 節子…(美) 傳 安川久流美…(云) 西 いわを…(美)

ア・ラ・カルテ

表	川柳家	編輯	柳	各	-	日本	粒	Ш	近		1
紙繪	戶籍調	の窓	界	地	路	个名所	k	柳	作	創	に付めは
	***************************************		展	柳	集零指	名物		151	柳		13
鳥	綠	汀	望	壇	卡 相	別柳	集	塔	樽	作	一語権カ
平	雨…(善)	柳…(炎)				(四國					・ 高権力にる・・(宝)
表紙	本社句會	本社關係の人				の卷)					
題字	案內	人々		路	喜西	前		Hili Juli	Hidic		
				郎,艸	多田	五五	崎	生	生		
裕				樂、	春艸	健選	lete	路	路		
重				汀柳選	秋樂	並	柳	郎	郎		
			611	選	選選	畵:	秀:	選	選		
	( )	(代)	(語)	· ( <del>美</del> )	(金)	(四)	秀…(云)	(011)	··· ( ) ···		
									,,,,,,,,,		



受 ふ 地 天 陰 名 同 親 け 快 謀 感 獄 井 0 月 賣 來 K K を b 出 畵 0 0 持 淚 た 雨 魔 ょ 0 手 鼠 0 智 饒 篇 K カン 漏 手 識 宣 思 白 は b 青 舌 5 あ は 傳 き 春 痴 見 カン が は 長 カン K ず す 0 0 K な 菓 る H < 如 灯 樣 郎 7. 虚 な を き 握 笑 6 る を 賃 生 放 6 U た 0 心 な な 吞 H る n 紙

路

選

郎

德 同 同 同 同 勝 同 同 同 同 同 太 郎

=



六 込 11 油 鲍 才. あ 叛 意 世 酷 叱 秋 舟 母 家 訥 怒 + カュ 話 7 氣 0 切 屑 ブ ほ 使 壮 b を 辯 唄 政 六 礼 好 無 T 人 手 だ た 馬 婦 を 日 き 0 投 き た to 5 は を 0 L が E 應 5 0 助 10 過 2 看 足 合 素 汗 握 馬 時 た 1 VC 親 H 生 去 を 護 性 n L 話 0 7 取 Ł は 2 切 る き を 拭 0 婦 早 T さ 越 は 7 動 カン T 鋸 す 淚 T 持 5 3 知 ラ 思 苦 な 力。 代 5 + 萬 わ ぎと 0 n ヂハ 勞 5 L る T 表 愚 障 る 秋 0 ボ る な 3 貨 才 な E き Ł だ る 0 過 を 瞳 引 痴 臘 0 テ 0 笑 6 8 後 唄 け 描 が がい 去 17 あ を は 妻 紙 心 を で き な き を 惜 な げ 聞 芝 礼 な 1 合 なのか 眉 to. 恐出 L b 3 4 き 居 毛せしいる ち 3 蕀 \$ いれる

大 尼 松 大 Æ. 同同同 菊 同 同 葉 同 同今 同 ii 觀 百 [ii] 庄 ri [ii] 11 松 路 魚 雨 月 介 関



漬 子 救 僕 享 賴 濱 胃 云 成 釣 用 ま 又 木 病 手 未 だ 力 U 世 酸 Ł 秋 弱 は 樂 6 れ 亡 功 物 は 3: 負 軍 殘 39 6 何 0 礼 か が 0 過 け 人 0 0 0 丸 聽 3 イ 6 爲 竹 時 T 多 て 日 3 無 1. 見 を き す 音 驚 C 刀 0 0 駄 出 10 力 此 ラ 手 榮 か ね 步 辨 な な 歸 < 世 稼 0 0 は は T " 0 K た な 秋 5 當 犬 野 す 5 h は 母 る 程 苦 3 7 多 E 0 叉 島 5 る で かい 心 結 生 靴 L Ŧi. VC h 人 は 寡 子 を \$ き ぜ K む を h を 0 る を を H 利 肥 を 口 た 6 カン 夜 で 拘 振 カン る 拂 惜 磨 淋 貫 H 文 魚 礼 な 秋 IC 7 b 指 2 力 0 L 7 七 ひ 5 T が Ł B 1) 敏 殈 0 6 が 食 3 世 2 な な Ł 落 る 1 百 B け ち き す N 役 る b b L 渦 す 1) ね る 目 b L

大 職 大 块 大 阪 173 籔 给 久 浮 天 同 120 同 芳 同 利 同 双 同 節 同 同 心 Ŧī. 米 生 雄 子 府 鬼 麿 泉 亭 秋



-衆 大 病 背 敷 眞 豪 乳 名 女 嫁 丽 職 子 ゴ 自 が 面 4 階 惚 雨 \$ 3 供 目 阪 人 0 0 I. 島 母 55 0 借 礼 子 が な 6 か . K 豪 0 車 5 を 達 は b は 養 す V E is 雨 7 は 1: 一日次女出生 女 114 ス 月 な 2 凉 子 他 白 生 力 カン ば 1 方 洋 所 6 L 5 活 Fi. 礼 10 0 L 知 5 5 ア 6 借 離 装 を 左 か 5 き 秋 ズ (路子) 双 本 道 b 0 h 0 見 世 金 7 80 n 風 ボ 遷 額 E 殘 寢 0 を Ł を T 帶 思 洪 T. 額 て た 吹 K 吳 な L 0 下 L 讓 る 3 n 水 を J: # 7 金 大 き L 3 3 初 見 K 旅 \$ 5 82 考 8 b Ł 15 あ 拔 紙 女 迫 h 3 女 直 九 戾 2 更 芝・る す C 込 云 た 1 け 事 3 店 3 居 員 7 H 3 3 n H 3. h 75° 3 秋 3 b ナ 務

明 長 大 長 今 野 江 和 治 野 石 有 同 同 丹 同 柳 同 柳 同. 翠 同吟 同 曉 同 同 爲 大 佐 車 兒 峰 女 童 郎 風



赤 物 質 新 朗 4 年 大 手 天 脚 妻 + 突 腰 手 き 新 0 日 鯛 術 瓜 線 Ł ED な を 柄 悲 頃 2 木 ゲ 背 が 拍 L 粉 あ 30 VC 聞 0 は な h 0 曾 出 で 子 K 10 た ま L す は 逝か 遂 100 丸 御 る 责 方 來 た 10 歸 た サ 顏 0 な れた鮎 岳 む K 盆 < 人 な る が \$ T 5 0 T 2 が 九 美兄 野 0 Ł 善 黑 拾 ゲ 0 泪 ば は 線 П 82 吾 良 た 空 た 路 月 氣 瞳 人 子 儿 0 が 笛 巡 呼 3 着 I. 身 肥 持 8 Ł が 0 0 あ 查. 鉛 杯 0 VC J: 夫 は 0 0 は 數 娘 な 5 3. VC 平 る 0 Ł づ 0 b 手 者 ょ K 5 見 文 VC 鈴 カン to む 長 行 カン 1 な 3 8 \$ な 6 0 0 な 倒 迈 音 n 事 婚 6 0 影 き 祝 ず n 秋 俺 る b n

	大阪		松江		高知		松江		nd		大阪		京都		游户
同	歌	同	登	同	星	同	圭	同	水	同	靜	同	白	同	朝
	都		美				之								
	路		也		水		介		客		波		英		丽



扇 ま 食 戀 醉 力月 カ 立. 女 な 11 訓 癒 子 な な 省 ギ た 4 1 0 6 点 志 5 兒 道 風 1 愛 房 L ま -H" 古 な 留 8 3 機 2 た 科 傳 3 0 0 0 者 だ n T 15 宇 + Ł そ 0 眞 飲 0 人 ば \$ 0 宏 新 IC 氣 生 0 る む な 沙 ^ な 礼 似 廣 風 膳 よ 0 膳 < は K 氣 陳 が き。瞬 L 紙 鈰 は 3 6 K た 0 82 IC 兒 0 幣 な を 代 乍 狂 る・笑 子 To 戀 良 明 ぼ カン 夫 0 義 東 男 供 6 人 亂 謝 0 为 力 E 治 3 1) 母 婦 親 自 0 紳 は 0 寸 腹 な た IC K は あ 0 0 分 0 兒 沙 35 1: 被 す 0 な 愚 氣 が あ 礼 御 E カン 餘 5 0 が 偕 頃 き V. を 痴 0 が 先 カン ま 用 屋 流 力 T 0 お 1 き 0 0 が 0 け Ł K 寢 L 行 あ かい き カン を 出 to カン 6 17 あ な 泣 が b b 釘 Ł 出 L 歌 b る 0 b る L 1) き 77

高 松 大 大 高 大 氀 fp Ш 版 森 阪 陂 京 豫 一同 水 同 靈 同 寒 同 夢同 新 同 同 柳 同 梢 同 丹 富 市 = 美 鱼 子 草 文 街 香 郎 女



友 見 現露 親 赤 保 社 蚊 秋 不 昇 自 す 云 1 7 轉 き 荣 3. 達 給 金 L 裸 險 會 氣 ル 4 淋 0 車 燒 張 ま 父 は げ 屋 相 ク 嫌 は で 2 K 0 0 7 命 0 1) t を 10 L 10 は VC ス T VC 乘 雅 助 先 0 7 自 道 告 7 A S が 周 今 動 n 6 號 ダ 75 1.0 分 40 け は \$ 錢 頓 解 忌 5 年 0 る L 0 b 堀 \$ 手 0 4 足 ち 0 6 T \$ た 0 管 < 年 轉 出 世 . 秋 ま 居 E 箸 避 U 動 父 6 n 向 な \$ 相 を 2 6 n VC 0 暑 T が 作 PU < あ 0 力 0 82 ば カン カン 0 持 な 裏 + 有 to な る る 6 强 ち 娼 模 暑 煙 近 0 < T 0 0 を か b 松 味 範 合 5 周 < 草 婦 10 聞 な 行 た な は な 0 2 薬 餘 な な 酒 b b b b Ł 杖 型 < れ 忌 b 代 き 頃 b T

灾 废 京 伊 40. 大 兵 躁 阪 京 都 II. 江 文 靜 同 不 同 馬 同 狸 同 吉 同 丁 司 九 破 宵 京 = 公 左 占 = 右 路 葉 皷 兒 霞 號 路 司 山



馬

鹿

な

が

6

此

1)

\$

淋

L

V

額

を

1

3

5 た 戀 見 近 月 水 儿 盆 待 燒 7 流 砂 同 5 年 ス 時 脈 2 榮 末 踊 敵 濱 う 行 僚 香 0 生 4 1 b Ł が 4 b け が 0 を 歌 K 店 " 75 0 0 良 VC 0 隣りに 今 机 は な ば た 恐 意 淋 7 近 1 畵 時 \$ 種 夜 笑 そ 10 宵 0 知 L づ 味 L n 住 報 5 5 3 \$ 散 6 秋 君 顏 き 波 蒔 T な が た Ŧi. す 步 無 母 は 2 0 0 な 5 < t 分 + 額 ~ 妓 親 逃 默 晋 0 浮 だ 目 戀 h 型 感 h 蛙 0 げ が で け な ば を を Ł 世 5 だ 傷 る 逃 食 0 阿 知 負 カン 黄 Ł 0 金 戀 げ 7 ~ B 拾 b 波 b け な 昏 る 5 ま \$ て を ま 0 - 1 T 7 大 ま お 百 E な 居 2 思 で n す 給 吉 E de. b 水 Ł 1 た る b \$ b 姓 ~ 戀 る CL

粕 4 簽 大 火 伯 大 京 \* 石 大 大 金 B 堰 111 阪 岩 311 100 Ŕ 部 根 阪 都 阪 藤 朴 緩 Ξ 都 義 美 船 昇 E 清 秀 公 淚 樗 定 肖 勾 會 風 tt 生 泉 配 子 路 留鯉治彦 峰 子 人 Ti. 笑 柿 吉 俊



晋 空 落 遠 雷 紙 1 秋 咳 去 1 殖 足 無 女 す 方 芝 音 想 死 35 燈 HII 遊 前 教 4 ス 霞 居 te 者 を 神 九 ラ K 6 本 證 昌 厭 が H 于 20 0 2 7 夢 西 だ 殘 0 此 據 吐 き 描 0 3 美 プ 世 2 ま 4 け 0 銅 息 る 湖 六 8 17 b 1 0 T b 0 7 7 1 錢 讀 を 國 訪 100 0 步 親 Ł T は 擴 T 見 を 義 ば 見 書 1) 境 H K 5 1) 力。 6 初 は 人 入 兄 17 せ げ 髭 20 線 T 村 b n 老 縫 2, 絹 を 22 死 < T 見 T T は ま Ł 0 は 2 た 1 る 10 Ė 儲 \$ 云 息 湖 中 0 V 裾 6 1 0 寫 任: Ł 3 Ł L 階 7. Ł 0 5 模 光 眞 會 3: 行 す 感 言 樣 UL t 宫 b る 班 た < b 1) 10 3 き る

辟 無 大 具 大 111 大 伯 大 pi Jis. JH 丽 璨 阪 木 阪 阪 阪 木 南 都 好 花 B 晴 天 0 月 源 龍 け 世 柳 風 Ł 間 h 履 葉 夢 郎 子 鳥 舟 郎 狂 子 步 鳳 太 音



テ 靈 看 診 趣 情 白 燒 名 百 叱 濟 ほ 將 未, 街 或 1 柩 10 6 李 謎 斷 味 ズ 棋 ま 3 3 欲 萬 車 ル L n 夜 婦 は な 醉 夜 1 0 鶴公園に古今傳授の松を見る 負 ボ 0 て 0 圓 0 2 來 0 並 0 3 5 5 0 あ 3. 包 to 騷 to 3 渦 大 定 烟 合 松 0 Ł 話 Ł な 3 学 同 3 む \$ 期 卷 思 0 0 人 相 た 貞 T 才 力 異 典. T + ス 3 手 ひ 操 0 华 × 30 7. Ch 結 動 发 生 映 な 野 ラ が 出 太 0 5 J: な 0 が た 婚 情 き 畵 郎 舉 は 球 0 手 欲 む E Ł 0 伽 だ る Ł L 向 瘦 子 げ 0 h は け 母: 覺 8 青 H 噺 世 を な な 話 風 T を < E る V 学 6 7 寢 5 力。 な 娘 1: 九 \$ な 愚 娘 T 8 n 20 カュ 出 5 かい b 空 b 秋 寺 な る ち b 痴 Ł 世

張ケ池 松 尼 火 大 石 松 M TI. T. 繭 治 江 阪 胶 111 阪 I 阪 笑 善 Ш IE. 沐 輝 粹 S 薬 笑 5 彩 青 笑 H JII 句 Ł さ 0 0 兒 鬼 樓 朗 柳 天 親 助 光 鬼 む 泡 朗 柿 虎 丸



薄、大 出 引 見 老 賽 表 Ξ 若 太 卒 Ш 結 82 秋 お 行 來 越 文 简单 VC 錢 0 札 度 鼓 納 阪 人 想 去 震 來 82 L 82 儀 は 躺 0 が は 目 は 腹 0 L す 雨 は 子 糸 T 0 足 0 71 借 初 る T 白 0 潑 0 百 4 \$ 荷 南 VC 美 癖 さ 中 85 居 溂 年 圓 銅 金 水 Ł n 友 VC 引 京 7 禍 Ł 0 派 が 增 L 札 0 達 \$ 0 は ば 豆 移 ま 手 あ わ \$ ^ 0 緘 足 藥 Ш 並 3 ば な す 轉 10 る る 交 火 を 母 -0 寫 7 TI 6 b IC Ł を 投 Ł E \$ 熨 K た 0 L n 82 7. + 眞 餘 不 痰 ラ る 安 V 31-休 ~ 想 b げ = 儀 h 壶 愁 班 1 秋 雨 あ ま す で 込 は な FI を ホ K を 0 き が 0 あ 3 ぎ ま n < 1 凉 居 出 h あ せ 知 ナ 礼 汗 る ル b 勤 E る n す 4 4 る る T

尼 松 石 松 大 簸 大 I 111 阪 灰 111 陂 脑 器 治 I 天 翠 綠 忠 文 水 比 蘇 Ł 柳 美 柳 木 品 章 IE. 呂 L 智 太 樓 志 堂 を 夢 子 朗 通 子 泉 國 陽 水 可 庫 75



日 合聯 時

京川

阪柳

神

各

支誌

部社

111 十二月七日夜 柳 忘

會 會 場

年

大

詳 細

は

追

而 發

表

大阪 日 本 橋. 俱 樂 部

甲 受 朝 17 不 俄 謎 あ ス 具 取 種 冷 凉 身 礼 丽 な יי から 合 用 IC 妓 K 7 カ で プ 2 0 書 女 咳 死 平 刀 .0 h 安 0 落 手 で 感 さ で 素 殺 心 持 楝 0 L 帽 を Ł さ 判 足 n 云 n を L 0 T 3. 音 た 7 肩 3 晝 夢 を 3 寢 居 綿 4 IC 0 0 な を 1. た 足 受 浮 使 見 袋 指 吉 to 3 b け b CL

松 命 津 阪 媛 JII 7 失 は 華 賣 崙 凡 讓 失 非 儿 喜 常 る 茶 固 蓝 村 名 兒 を 紫 亭 愚



# 胸 0 火 は 拵 物 0 公

(520)

いらだ」せる。 奉公人很性から拵へなくてもよいのに、 省二二 怒り或は妬みの情を、 胸の火又は心の火といふ 自らひがむで心を

大方からである。 秋の屋= 奉公人には限るまい。ヒステリーの人妻などは

魚=味ひのない句である。

(521)音 羽 0 瀧 1= 80 九 る 乘

4 0

にあり」と は四時增減なく清冽にして所謂五名水の其一なりと拾芥抄 = 京の清水に有り。 尚ほ瀧の附近に有名な浮瀧があつて、音羽の 都林泉名勝圖會に、 「音羽龍

> 篇 究(」九) 本 子 秋 省 東 0

り瀧三すじ西のかたへ落てと。乗物は内で床かしき人、凉 瀧吞みなど興じたといふ。都名所圖會に、奥の院の下にな しくもありなむ。

秋の屋 魚 何となしに凉味の溢れる句であると思ふ。 凄艶な趣。

(522 Ξ 味 線 ŧ 弾 < 日 0 女取

爪彈、氣分の出て居る句。 省二二 藪入りの日を賽日といふ。三味線を取出しての

飯を焚き、亦一六の日を月六齋とも稱した。 秋の屋 魚=大どこの商家の娶さんであらう。 毎月の一日、十五日、廿八日をも齋と稱し小豆

書に因ると鼻も斬つて居る。一耳を切つた記事は古く朝鮮 にあつたやうだ。 (523)-- 「塚になる程そいでくる日本勢」。京の耳 本 0 伊 潼 1= 筑 た 耳 塚 塚。

H

心持ち、これ見よがしの心持ちを、 白い味ひに用ひてゐる。これも其一 で現はしてゐる。 秋の屋=耳塚ではなくて、鼻塚だといふ説が有る。 魚= 武玉川ではよく「伊達」と云ふ言葉を、一 かく「伊達」といふ字 例である。得意然たる 種面

郎 1= 成 T 歸 る 濵 荻

=

9

して歸國したのである。 秋の屋― 伊勢より江戸に出て居た、松阪屋の店員が元服

前説正解であらう。 魚 濱荻で伊勢をきかした類例はあつたやうに思ふ

(525 男 自 慢 0 譽 る 初 雪

が物になり」とも詠まる。 いてはもの 省 二— 初雪をほめるはよい。が男自慢が鼻の先きにつ になりさうもない。だから 「初雪を譽めぬ息子

であらう。 秋の屋 男自慢などする奴は、雪よりも傾城にふられ勝

> 魚 ほ 洒落本に出てくる半可通などが、 6 1= 泣 時 地 女 0 想像される。 Đ,

(526)

ıl;

女の聲になるもの。「地女の心になる眠 秋の屋=人の死なんとする時、 省二二 新造なども、本當に悲しくなつて泣く時は、 共聲悲しやらで、 い時 眞劍に 地

なるときは、作り聲はせぬ。 東 魚 同情に値する。穿ち味の句である。

(527)辷 1= 時 1= 惡 心 は な L

寸恥しくなつて、獨り笑つたりする。「世を捨てた人も 省ニーその刹那、 悪心の起りさうな筈はない。が後で

**辻れば恥しく」(武四)。** 秋の屋 魚 無意識に南無阿彌陀佛をも唱 面白い句である。大抵女の人などは、痛さを忘 へるだらう。

(528)裸 で 步 海 + 0 貰

乳

れてニャーく笑つたりするものだ。

だから。 省二二 作爲が目立つ。海士だつて裸許りではゐないの

秋の屋 (529) 魚 遣 唐 含蓄の無い凡句だと思ふ。 無造作な處に、 使 青 海 原 つそ哀れさがあると思ふ。 1= 老 明 き

原に出て眺むれば、今更に自然の廣大無際限さに、ぼんや りと口を明けて居る。 省 = 遺唐使といへば、 立派な知識人であるが、青海

ひ切つた表現である。 秋の屋 魚= 井中の蛙大海に驚きたる貌。「口を明き」は思 渺々たる大洋を一望して、呆然たる態である。

## (530) 泣 止 ぬ 子 1= 藏 Ø 戸 が 明 <

ます、など、藏の戸を明けてみせる。 = だゞをこねて泣止ぬので、ではお藏の中に入れ

秋の屋 魚 私の幼年時代にも、經驗したことである。 金網の戸のガラん~と云ふのは、小供に不氣味

(531 先 4 女 て 恥 る 借 () である。

のだ。 くもあるが、知合ひの奥さんに借りに行く。先方も亦自慢 してくれる。女同士としては、其邊に複雑な心境があるも つて、 て貸す程の衣裳でもなくて、これで役立ちませらかと出 省二一例 羽織とか帯とか時節のものがなく、言ひにく、恥し へば祝儀の場所にでも出席せねばならなくな

秋の屋 Ī 前解の如くならば、 「先の女も」とせねば聞え

82

に恥入る、 と云ふ心理を詠んだのであらう。

東

魚

女が女から借るので、已のたしなみなさを同性

(532) 瘊 せ る 心 で 我 4 枕

つらくしと。

省二

子供をねせるため、手枕をして居るうちに、

5

秋の屋=まだ年の闌けない人妻であらう。

そつちのけで寝る奴もある。

東

魚一いや、年をとれば取るで、圖々敷なつて、

## 祝 日 0 持 料 ほ E は 美 L

省二 (533 祝ひ事する日の持料が立派である如くに、

その

18 -

解しかねる。 持主の美しさを表現したもの。 秋の屋= 持料ほどあつて美しいと云ふ意敷。「ほどは」が

の意であらう。 魚=「ほどは」と云ふのは、「持料と云ふ持料凡てが

## 534 來 る ٤ 鹦 鵡 0 H 本 物

ある。 なる。 との疑問がある。 省ニ=「異國から來ても鸚鵡は江戸言葉」(古句 一昔朝鮮と日本の間に鸚鵡を獻品とした記錄が色々 朝鮮に真の鸚鵡がゐたのか、 インコではなかつたか

# 東魚=「渡つた鸚鵡日本物言」とでもしたら如何。

# (535) 精進を落て目出度人に成

な。此句親の死後一家の大黒柱となるの意か。
進落をして、やつと夫婦の氣分になるが如き場合か。然し をれだと「目出度い」でなく「嬉しい」方が勝つかも知れ をれだと「目出度い」でなく「嬉しい」方が勝つかも知れる。

東 魚= お説の如くであらう。 家督相續した故に、目出度いのである。

# 536) 戸へとりつくと 地震 ゆり

止

省 1= 地震國に生れた日本人の體驗なのだらう。大膽に構へてしまふ事だ。戸へとりついたりせぬ様、御婦人方に構へてしまふ事だ。戸へとりついたりせぬ様、御婦人方

いふつ

**秋の屋**= 戸へ取附くのは、多分女子であらう。男子なら、

東 魚= 取りつくともう震り止んでしまふ。處に狼狽し

# (537 吉原見せて伯母を立せる

産咄をもつて歸へるわけだ。―伯父さんでは毛をふいて疵せられては、伯母さん膽をつぶした事であらう。大變な土

秋の星= 此の甥は粹か不粹か。

東魚=面白い。伯母で面白い

# (538) 衣にたすき蕎麥寄妙

な

IJ

不許蕎麥 常院の清規故 入院内といふ石碑を門前に建てたとれる。天明の頃此の寺の蕎麥は、本寺より禁制となり、れる。天明の頃此の寺の蕎麥は、本寺より禁制となり、

東 魚= 叙法が眞面目くさつてゐるやうで、却ておどけ

# お願ひ

閉、御關係新聞を一部御惠送下さる様お願ひ申上ます。 全國の新聞柳壇の調査を致してゐますので、皆樣の地方新

所內 汀 柳

事務

路

郎

選

藥

劾

力

か

枕

秋

0

雨

勤

めの

身

0

2

1

3

VC

清 き

月

0

出

で

若

h

那

0

股 權

肱

拜 兒 不

領

0

ボ

12

#

1)

1 き

藥

取 b

0

妻

0

ほ

0

礼

E

有

難

L

非 聞

H

法 to

天

0

沙

關

木

雅

幽

かい

L

<

無

5

平

あ

b 夜

蟹

0

泡

書 桑山清美君を悼む 送 る K 由

新

刊

な

き

君

悼

む

ふと我れに

カン

b

秋

0

を

開

き

見

82

春 元

が 降 る

太

勤

修

0

鋪

佛

옗

0

影

播 扇

る

1

を

見

紀

窓 觀 は吾 音 像 が 何 窓 0 3 魅 1 惑 中 カン カン 0 IC た T 8 ま よ は 3 す

迷

Ш

本

雨

くさめして母 こんなとこで吞

0

L

づ る

力

な

ほ は

E 母:

き 知

\$

0 す

そこ

は

カ

Ł

な

<

逝

<

人

VC

君

が

あ

b

んで

る

Ł

6

方向

は

H

な

Ł

ち

7 0 な 吹

22 2

カン

な

0 字

る

L

柿

苦 カン

難 げ

を

越

L

た b b 汝 妓 た V2

姿

な

b < b L 8 さ

K

4

L

雲

Ł

な 7

流

礼 る さ 3

ゆ

うつむ

きて咲

<

花

Ł

は

び

にて誰

れと住

~ カン

き n

0

だ <

秋 死 叱 人

カン にも

ぜ

K 世

to T

16 5

Ł

撥 る

J:

袖

づ

<

ま

b

主 3:

> 0 n

感 資 家 借 あ あひて(二句

戀

を

裂

\$

5

け

T

駈

b

L

友

0 父 <

母

E

親

0

痴

さ 役

僧

2

1

3 は 目

6

n to 愚

る

師

を

ば を 3

訪 消 b

ね L な

T 7 が

吡 床 6

5 K 有

n 入 難 硘

る

增

位 汀

柳

た

カン

きといろをい

だ

き

電

車

道

を

越

克

82

丹

秋 心

路

山

本

非常時 きみ 役 本主 П + 情 賃 を 金 0 T 0 VE PU T Ł ざ 0 0 義もおどろい 腿 0 カン イン な 稱 à. め Ŧi. 鏡 K よ 大 す 5 to 誰 を 3 テ 金 雜 き 思 る \$ ~ 1] 3 は 踏 な 想 T 4: 戀 3 V 殘 愛 支 商 K 7 き 25 < L 6 突 出 \$ す 5 3 < T な 82 そ を な ~ 礼 ゆ 李 1 2 ح 忘 TI. 5 L < Ł 1 1 n き 礼 之 身 言 日 な = K 悪 1/2 7 T 力。 ズ は あ h す b る な な to 魔 ち す る 4

底 0 清 を 美 月 女 を は 殊 悼 5 t 更 < 妓 b Ł を 5 淋 な づ < き

夢

生

田

翠

82

堂 背 信 秋 秋 株 辛 貧 萬 誘 樂 蟲 秋 p 1 惑に とい 瓶 0 \_. 0 心 は 波 5 \$ 0 1 0 ייי 7 給 名 朝 字 7. 0 叉 瀾 \$ よ 收文 3. 勝 あ 0 仕 が \_\_\_\_\_ 秋 小 0 0 が 柿 0 L 字 0 あ 冷 場 L 0 は で 役 好 厨 \$ 詮 よ 0 が 7 所 7 で 風 議 3 文 人 き は 酒 出 n カン B 俺 矗 邪 7. 7 を 6 3 T が 儲 不 は 得 Ł を 供 煙 0 が 法 家 L Th 0 草 た 82 け 蟲 4 氣 子: 鳴 # 螺 0 たさ Ł 0 が。 赤 忙 5 き な 1 3 0 VC 0 8 打 岡 煙 俺 學 L П 長 から す T ま 4 S せ 5 to から 0 ば 20 0 H 夫 n 濃 秋 給 生 3 子. < 中 L \$ h 湯 出 妨 5 祭 き カン 3 たぎ n b 氣 某 た L V 人

指傘佛一秋

さち

せせ

ばば

夕 晝

~

にさ

連び

0

5

5

がな

りき

\$

しる

5

秋

b

蘭西

語

H

4

0

2

1

る

1

茶

E

O. L

秋子

0

1:

を

ば書

そか

4

5 L

8

るず

2

カン

0

樂

が

疑

だ 李 隱 拔 恩 生 借 きか \$2 0 給 7 金 L h 月 82 雨 け 0 坊 こうに與 る 鐘 白 H 髭 が す バ 10 樓 た 近 湯 る ス 3 有 ば は 1 5 主 7. 句 2 さ 閑 を 市 -C. 洗 75 屋 7 電 な L ガ 0 濯 4: 4 を 5 4 傘 持 意 腰 思 45 な 秋 T 地 を を CL を E あ が 井 思 掛 炒 3 ま 付 あ b き け 春 Ch 1 L

金

借

b

た

弱

身

は

椅

3

を

讓

b

ぎ

鮎美

水

谷

光

0

ぼ

0

と妻

0

+

が

to

Ł

な 石

る

H

te 根

曾

民 郎 2 久

0

な

b

To

行

4

る

親

類

ば な 子

カン

b

左

b 75 L

もうこ

な事

を

知

0

7

3

K

5

は

K

\$ h

な

n

ば

義

捐

金

الإ

叫

月

給 暗 4

H n 世

あ

h

仲

0

よ 知 來 立 す

さ 板 る 5 4

秋 酒

き 下

\$ で

書

to 6

b n

告

儲 な 奥

宅 佛 3 は

教 5

T

須

磨

明

石 な K 本 伸

船 前 書 廊 L

0

中

力 た

5 Ł 5 ~ 入

手

を

カン

ざ

久 埋 ほ

仕 立:

度 地

醫 3

者 T

0 は

言 枯

葉 葉

0 を

あ

た

b

よ 音

3 カン b

婦 る 問 5

林

1

金 庫 都 番 t 風 b 0 景 H 2 5 な 顏 で な L

引

越し

した

カン

2

かっ

Ł

2

n

で

願 2

水

枕

欠 を

5

L 5

n

K

四 村 明

珠

F

足 2

父 1/2 5 內 紐 坊 使 故 は 意 房 る は 慕 10 4 n 來 K 坊 0 3 彼 を る 平 智 が だ 82 \$ 知 身 和 慧 5 Ł 0 犬 博 は を 名 斷 T 0 士: n 無 亂 を 言 さ 力 な 駄 T 3 拾 出 低 蔭 ま 2 h 7 町 來 利 だ で Ł E 82 1 內 貸 VC 遲 2 す 實 孕 時 力 會 參 0 る を 4 を 凡 Ł 願 中 E を づ Ł

ラ

飯 < パ 番 L h 盛 た VC ば ク ま 耳 る 扳 宿 1 だ 事 殘 K ば 腿 直 死 度 か 0 VC 0 胸 T h b ПD る だ 映 0 無 0 V 3 t 人 5 T 大 生 が 葉 S 勤 同 n 鶴  $\equiv$ C た 鷄 あ 8 喜 0 頭 號 先 顏 b

Щ

奥

野

禿

由

H b

須

临

豆

秋

秋も早 陳情 4: 秋 0 0 團 食 蚊 中 à. Z は 草 胸 V ~ な Ł 0 酒 1 0 ボ 3 0 T 3 中 1 4 で ^ を る 落 1 1 4 5 + 1 h " た な 丰 ま 2 1 カン ガ け L 1

思

27

b

た あ

親

酒

な

h

0

篇

\$

0

た

\$

0

朝

田

新

水

法

律

\$ 切 T

知

6 醉

ね 3

ば T 魔

な 戾

5 0

४३

婿

を

春

喜

多

素

8

T

b

5 人

n K

て 褒

席

VC 6

歸 n

0

T 腿

椅 を

子 空

を

引 P 働

5

T

<

n

る

かい

6

居

T

P

る

0

な

b

世 女

知 成 叱

つて

ねて

笑つ

T

る

ま

す

ウ

I

1 L

V

ス

11

織

着

た

街

0

8

秋 3

Ł

な

b b る

Ł

を

0

バ

ス 毛

VC

む

主

6

L

<

秋

0

電

車

を

編 中

h

で

西 李

子

0 姑

出

一來ぬ伯

張つてやがらアお辭

儀を

0

損

た

5 吉

秋 齒

の野

~

必

0

<

b 女

煙

草

カン

7

な

0

治

療

ま

で

8

大

臣

書

力

n

T

秋

用

帶 醫 0 は t な す な V で b 家 嫌 E K 產 な 男 婆 度 0 は 目 肌 見 を T K

吉 田 水

娶 觸 通 Ł 0

b n b b 前

車

似 默 た 0 る 7 女 L ま 2 る 3.

愛 酒 月 處

L

主 0 誉

す

2

n ~ T 誇

カン

5 VC 人 朝

女

逢

は

82

な

b

場 から 女

秋 過 5

カ ぎ 3.

ナ

九 波

利 笑

うくに案山子と Ł 母 K 5 や 知 0 5 0 力 な た は ラ 有 L b 1 酒 デ あ

0 ブ

味

1

b <

空

高

4

to

濁 水

澤

6

ね L

ば 第

6

す

\$ 社

難 訪

L ね

冬

0

濹

山

父 な

命 叫 2

=

夫

人

惜 親 子 叱 圖

L 切

ま な

th 方

T で

死

h

だ

先 る 日 る は

生

借

が

あ

b 人 た

秋 サ

は 0

あ

が 忘

弱 n 亦 を

5 T 偉 摘 おち 世 かとつ 渡 人 んぽを出 b 0 たそ 通 10 b = n L 家 味 が 7 出 彈 七 寫 は < 草 す L 人 0 10 0 to Th 手 多 Ł 間 8 き 0 が 0 カン To Ł な す n

0

頃 人

は

ね

ば -C.

六

法

な

h

To

居

0

前

子

供

侮

5

青 木 史

. 呂

17

鐘

姬

H

を

b

西

酒 昂

量

ま

で

書

5 0

T

懸

賞 L カン

尋

ね

人

俗

怠

期

階

を

貸

さ

5

Ł

思

頃

が

H

10

浮

芝

居

打

0

氣

1

2

-

を

君

知

る

中

5 斯 2 愛

ち 0

\$ 如 會

時

隣 功

\$ 世

儿 る

時 E

か

秋

夜 用

0 車 b 礼

ŽI.

戶 0

2

る

< ル

成

自 讀 10

家

奮を

7

1

E

世

5

10

T

主

15 Ch

女給にも意 珠 折 戀 別. 沙 6 0 れ 壶 あ n 地 L 女 3 0 は 女 そ 0 人 あ 0

魯 手 初

10 加 3 潮 淋 Ł K L T 似 き 不 米 た 曼 む 田 珠 b ば け 沙 カン

3 る

ま

b b

風 神防空演 障 習 子 0 中

0

子

澤

山

京阪

イ 0 夜 v は > 自 0 支 殺 配 未 F 遂 人 0 が 動 話 5 \$ T H る

我 部 睿 明

曾

華 U

曉

0

星

を

見

馴

礼

T

轉

轍

手

兒

亡

人

失

禮 秋

な

言

葉

き 來

< る  $\mathcal{T}_{i}$ 

1

Ľ

1

E

ス

强

請

時 前

代

子

焦

燥

0

連

續

笑

夢 未 サ

さ

6

b 若 ス

忘 1 サ

n

T

平

井

肌

=

郎

青 奈 H 散 5 IE. 慰 折 婉 82 髪 直 年 良 記 80 曲 勒 IF 防 を 7 な 庫 · 京 帳 屋 n 大 空 返 裏 酌 カン 都 巡 見 10 it 事 は 人 0 演 F 查 合 似 を 礼 E 1 用 習 物 to 0 す 拔 5 な 氣 1) 頭 Ł 關 n 0 擢 0 ば 3 を た \$ Ł か 思 票 0 鳶 吡 入 礼 は 6 日 荒 市 君 は 後 宫 n b 軍 知 が かい た 井 な 場 K n 膝 藤 岡 舞 10 用 嬉 椅 6 5 沒 英 行 青 機 ず Ch 來 大 白 ず < 子 ず 智 食

夫

V

1

機

妻 4

を \$

魚

L

貨

さぬ

とは

云 2

は

す

貨

す

又

K

は ず

逢

5

カュ 3

Ł

電

車

を

乘

1)

過 K

間

を た

n 5

す

着

+

掛

浦

團

敷

蒲

團

素

直

VC

朝

かい

<

る

兒 秋 親 な

0 0

寢

額 金 て

見 魚 貯

Ł 0 金

礼

る ね

妻 た 1)

IC 音

慾

から

な

L き 來 八 b 九

朗

夜

は を

を

峰

女

F 煲

主

或 容 夜 嫌

勢

个.

~

< 替

<

な 八

母ア

ち

4

h

b 調

呼

3:

7.

が

今 E る

+

Ł.

L

借

る

用 年

が

出

粒 h

集

ひ 0 朝 ま 長 0 ^ 临 曲 立 柳 4 0

健

田



## 山 前 田 五 健

松

と私が耳を濟ましてゐました」 ○シットへ(Kさんが何か云はうとする、 、「雨の夜です、川柳にムヅの素人K さん 前の分は何やら早口で判らなんだが、何 を云ふたんぞなもし 私が手を振るヤット放送がすみました)

○東京の久良伎先生さ、判りませんでした よう判つたぞなもし、川柳と云ふのはあ か、あとはどうです。

眼でデワー 詰め寄せる様なものです… つまり大上段で打ちおおろすのと、中正 ムゆう工合か、なもし。

…まだ降つてゐますな。

# 大 阪 森 東 魚

った。 單時間に、やつてのけた意氣を嬉しく思つ び盡されて、さぞせいくされる事だらう に期待しなかったので興もあまり感じなか た、門弟として有難くも思つた。選句は別 は日頃云ひ度い事を云ひ、叫び度い事を叫 ヤ味のない良い話振りであつた。久良伎翁 般の人がさら思つたららと考へられる、イ と思ふ。あの猛烈な早調子であらひざらひ 話は實にうまいですねといった。恐らく一 翌日會社へ行つたら、T氏が路郎さんは

に幾十語といふ超スピードのテンポは別 、久良伎氏の講演 損失であった。 常識を疑られるだけ、川柳家にとつては たのは迷惑であつた事と思ふ。川柳家の 放送局としても、揚題と内容の異つてあ チンプンカンプンだつたのは、ひどい。 としてその内容が誰にも別らない程度の 全然ゼロの一分間

東 京

高須

啞三味

度か聞きもらした。これは、川柳家の我 、路郎氏の講演……その人良伎氏の後だ 念に思ふ。 讀むと、語尾が消えて、句の下の句を幾 救はれた氣がした。惜しいことに、句を つただけに、あの落著いた話しぶりに、 人達には、なほ判りにくかつた事と、残 々にしてさうなのだから、川柳家でない

、選句……せめて、選者に披講して貰ひ たかつた。まして、 から聞きたかつた。 その批評は、その口



# 豆 秋

# 福 田 山

# 雨

樓

に似 が高められてゐるだらう。 れだけその男は若さを永く保てるし、妻君への人間的認識 十六で初めて結婚したとすれば、 の戸籍調べに依る)。 た意味合で歡迎されてい 秋 一君は三十六歳から川柳に手を染めてゐる 割に晩學の方である。 III 10 柳を晩學するといふ事もこれ 晩婚だと言はれるが、 男が若し

を見せなくとも、 は仲々止めつこない。若者のやうに潑剌とし 川柳を止めてしまふ例は澤山ある。 晩學の强味である。 若くして名を擧げた天才作家が、 世間を知つた堅實さで粘り强く續 そこへゆくと晩學 三十になるか 詩才の ならずで ける。 関き の方

かも 豆秋君は川柳を始める前に仲々苦んでゐる。

は 間 除生活、 啄木張りの短歌に紛はさんとした時代があつたやらに記憶し の辛慘を甞め其の悶々たる心を、 結婚生活以後は、急轉事ごとに人の世の苦杯を喫し 或は酒に忘れんとし、

て居る」

だけ彼の川柳の底邊を廣くしてゐることか。 と含弟三汀氏は述べてゐる。此の生きた人間

植 險 木 角 10 屋 13 な は 質 る 保 屋 話 貧 險 E 和 屋 服 ٤ 0 志 折 40 7 6 れ て E 來 た 存 IJ

禀質的 事も亦見逃せない。これは彼が生れ乍らの川柳家であり、 はないか。 世間の表裏に徹した作者の 見てもそこに根を卸し 本流であるところの などにその に恵まれてゐることを物語るものであつて、 確かな觀點を窺ふ事 しかもその底に 2. 1 てゐるのである。 モアに對し 人間的濾過 抹 が出 0 2. 1 來る。 ては、 が、 七 アが流動してゐる 句を味 彼の句 透いて見 は ふ程 何 JII えるで

手ぶらでは 鹿 \* 相 手 K L て 吳 九 ず

7 など ŀ: げる滑稽感であ は た ろうそく 微苦笑を 郎 10 Ł 0 新 0 上 湛 灯 婦 な えたも 手 15 る。 鉢 12 0 ~ 更に 0 ず 筋 每 であ を 3 朝 賞 り、 迫 水 は 33 を 明 ち ÉH P き な 6 彼 n IJ 3 0 內 體品

すも 事に氣がつ 0 身 境 0 句を 0 を 瓢逸、 句 1 0 根氣 ーモ があ K 更 老 托 洒 0 夫 生 る。 よく拾ひ集めて見た アを振り撒くのである。 L いたのであるが、 脫 子 終せたと同じ行き方でもつて、 振 婦 b 0 馬 \$6 茶がその性格を 10 話 **希望** \$ 至つて 術 早 ~ 文 か は、 (2 何 2 b 1) 1 が 俳 投げ出 人一 7 起 七 3 本誌 7 そして 舌 茶の は 3 を して、 隨 川 ま 机 Ш 所に 割 風 柳塔 格 に多作 b IJ 3 彼獨 轉 が を すら 豆 が でな から 秋 0 自 てね は 偲 0

俳

ば

彼 滿

ブ

手を 晝 0 僧 振 3 月 0 6 7 を な ほ 見 猫 N Fo ても 0 ば 変 手 新 顏 宅 3 L 地 が 6 7 な 笑 は 引 3 淋 0 2 L て ば 6 + 見 去 た れ 3

たの

俊敏 などい な川 くらでもある。 取 兩 柳眼 1) 頰 が意外 を 寸. 7 + 1 E K とり \$ ゆ 8 澤山 < T わ 後 老 向 け けら 女性 妓 家 煙 を詠 n 草 あ ること 0 足 喫 to III 袋 TA は 柳 面 に 白 0

> So つて見ると、 D. 秋 「生活 君には 許 風 國 + x U ス 防 1 婚 即 V カ III たことも 婦 具 E v 金 柳 1 人 ス 及 1 を唱える彼の 0 0 あ 煙 大 H. 何 那 \$ 2 草 亦 た あ 多 とを な 女 5 尊 0 せ 汗 追 本 そし い生活 頂 て又 K か 化 力 3 け 記錄の 秀 礼 75 粧 る n 頁をたぐ to

句

が 多

から

昨 12 年 0 + こう 懐に 友 金 味方になつて詠 0 が欲 あ 秋 \$ お \$ IJ L IJ い欲 よ又 金 豆 あ 金 秋 が 借 \* 君 ば 1 あ V IJ は 名句 ひ續 消 ٤ ナ 10 t 聽 ス 7 來 けって が よ れ 診 7 ねる 3 無 1 器 以 惱 13 L 來 3 3 75 40 5 3 10 ナ 3 だ 17 は

全く まなか をも 秋 には、 豆 0 秋君 0 L 秋 關 たが、 た。 風 西大風水 0 眞骨頂 當 0 秋 時 中 になれ この 害に で を 示 何 乞 際し ば自 L K 食 た 0 8 いて づとロ T 10 0 僕は と言ひ 拜 K ま 出 本 た 誌 る程感銘 九 月 評 更 IC が深 昨 を惜

そ 他 つも句會に出て來て、 Ŧi. 大 句をも 每 \$ のし 止 て、 n, 之れ 住吟を 豆 亦 腐 月 吐 評 屋 欄を くのも 8 驚かし II: 彼 の熱心と技 た。

が盆 る 25 圓 0 は 熟 僕 を 示 人で す 所 は 以 あ で る まい。 句 會 で 彼 0 )內 顏 は課 を見る Ł 胸 から す 0

買 功 中 出 夜 水 初 勤 0 成 之 兵 櫻 H 0 葉 ŋ 島 前 0 春 子 が E 7 F 身 仁 颚 0 鳴 0 3 浴 0 下 義 I が 蚊 衣 力 は が T 方 を 10 か 丸 子 137 行 反 0 K L 商 頭 癡 づ 提 月 0 横 げ V 夜 3 が 3 7 かい 配 匐 出 れ 看 來 れ せ ŋ ず ŋ 3 3. 底 ぼ 3 る 板 買 身邊 中 T 出 之鳥 幻 日 初 前 近 衣

るめ 甞 るで ど光る地 晚 1 80 學 あ な 度を であ た苦杯は、 モ ア作家としての態度を築き上 結論を急ぐ。 6 カン しつ るが、 0 金をも たならば、 かと把握 彼をし 全く川 つて 前 ねる。 て 柳に 彼 L 10 て、 \$ 0 層 その 2 生 述 自己 1 深 n J. 七 0 たやうに 5 アは今後完成 人間 0 彼 S 命ずる てる げてゐる。 が人生 味をも る。 豆 進 0 秋 えし 前半 磨 路 君 彼は 0 10 け は 域 ば磨 カン 8 K 111 じをゆ 彼 VC な 柳 3 ic 達 0 眞 5 句 0 T

H

男女 問 は り但 はし 階女 上子 別の 室集

日會 指 ス半月毎 ケ紙五週汐 111 一 圓 木町武 チ帖ブ 曜 責 川任 日 1= ツ中ク筆 午柳 П 雜 後 一數券制 一本、鉛 七 誌 時 祉. ょ 木 **り**二 1 筆 あ 5 ノー 時

間

ŀ

ツ

其川趣將 他柳味來 廣告漫画どうしての漫画、揮毫符の漫画、揮毫符 配漫新 書、揮毫等賴まれ 及畵を描 て描くか似顔 か似顔の世 た時国 描 方の 6 等為 82 爲

# 紹 介 0 辭

有て十武に 志密年氏は 2 滥 は如 力 日現 何 君 7 在 東せ 1 きは都 腕 力 士大、専門で阪時門 3 -あ時事 1 家 畵 事新 0 0) 報直 絕 全盛 接手 好 氏神 漫畫家 時 の月 指 引きがな 代なの 豐 新 富 聞 とし 兩 であ 經社 T 1= らう あ 實小大郎 戰 川阪

風

0 0 彼

便 句

b

K 0

聞

5 面

たが、

今後の活躍を刮目して待たう。

を代

表する選

手

で

あ

る。 在

梯

子酒

を止

80

社

は

III 風

柳雜誌社

10

とつ

7

嬉

き存

であ

る

ば

カ

b

C

なく to



飜る、風の行方へを御覽ぜよだ。
言句に出せば教に落ち、 文字を立つれば宗體に背く、たゞ一葉の言句に出せば教に落ち、 文字を立つれば宗體に背く、たゞ一葉の

川柳路郎宗の路郎盃を繞つて、 柳客雲集しあゝか、こうかと突川柳路郎宗の路郎盃を纏の事が言へる。選句も亦創作の一つに違柳橋」の雨欄に於ても同様の事が言へる。 本誌「川柳塔」と「近作柳橋」の雨欄に於ても同様の事が言へる。 選句も亦創作の一つに違切称い。

容啄を許さず、 指導精神と相俟つて拔かれて行く事との相違があ容啄を許さず、 指導精神と相俟つて拔かれて行く事との相違があ容啄を許さず、 指導精神と相俟つて拔かれて行く事との相違がある。

も、選者によつて採没を往來する危險性が潜む句に、非常に高價十月の一致して擧げられた句に或る標準を 下る句はないとして

豫め斷つて置く。

で句評をせねばならぬ事となつては、選者と作家と評者の息が

近作柳樽と川柳塔の句評である。 殊に今月はいろんな事情で一人

既に作家が絕對に信認し、選者が自由の境地に立つてその創作

ただ一葉の飜る風の行方を、 どこ迄突止めるか甚だあぶない事は致すれば、 それこそ藝術の至上かも知れないが、そうは行かない

と相俟つて渾然佳調を辿つて行くべき事今更贅言を要しない。 と相俟つて渾然佳調を辿つて行くべき事今更贅言を要しない。 で決めるものでない」と。されば投句者は選者を絶對に信認し、選で決めるものでない」と。されば投句者は選者を絶對に信認し、選で決めるものでない」と。されば投句者は選者を絶對に信認し、選で決めるものでない」と。されば投句者は選者を絶對に信認し、選で決めるものでない。 川柳の進步も作家ばかりに任か なきにして考べられる事でない。 川柳の進步も作家ばかりに任か ないではく、 具眼の選者の選句創作 と相俟つて渾然佳調を辿って行くべき事今更贅言を要しない。 と相俟つて渾然佳調を辿って行くべき事今更贅言を要しない。

- 31 -

# 作家の色分け

どうしたらよい 履歴書に 屈 改名の其 捨てた紙デバー 見渡せば ゴミ箱をあさる者よダ イン 南 託 園 を 見 を 盆 K 割 " 俞 子 救 後 小 る 何 3. 4 70 0 舟 0 時 かはすでには 卜待 經 泣 ici 醫 が ŧ か 0 旅 -1 次 が 7 ٤ 夢 6 T 1 が を 泌 を 手 た 身 ヤ 82 亡 3 が 様 山 は ま る K 6 出 は 太 世 か op 掃 九 な 4 82 郎 5 3 ŋ 與三郎 汲食子 豆. 春

一十月號川柳塔から、 作家の色分けをしたらこんな事になりはせ、 かなり多種多様の色彩が出てゐるが、 これがその人々の持ぬか、かなり多種多様の色彩が出てゐるが、 これがその人々の持

墨色判斷でどれ位人の運勢が明るのか知らないが、 雨迷君の赤インクの句なんてものは性格と 近況の運勢までが手に取る如く出てゐる。 同時は苛ら苛らした離貌まで讀み取れる僞らぬ句であるだが解説をすれば、辻占は半吉で、 そこまで黒字の計算が出てゐが解説をすれば、辻占は半吉で、 そこまで黒字の計算が出てゐる狀態である。

して、仕事に忠實な汀柳君であるが、取懸りは中々用心深く「見渡一一度を意を決すると、 扁桃腺が腫れて再々熱發する程肩を凝ら

といふ譯で貴重な神經質である。 といふ譯で貴重な神經質である。 此人に失敗がないのであるといふ譯で貴重な神經質である。

君の一色彩といへる。 学世の暗さなどは知らないだらうと思ふ程 貴公子然たる風格をやは出ぬかとは」丹路君らしい處へ持つて行くものだと肯かされたやは出ぬかとは」丹路君らしい處へ持つて行くものだと肯かされたそれで至極眞面目なんだから、 少しも與太氣はないんだから丹路ぞれで至極眞面目なんだから、 少しも與太氣はないんだから丹路ぞれで至極眞面目なんだからうと思ふ程 貴公子然たる風格を

「箸を割る一瞬」の句は某人君の力を確め得た氣がする、杉箸がさゝやかな音を立てゝ引裂かれた瞬間、 君は詩の世界に溶け込んさゝやかな音を立てゝ引裂かれた瞬間、 君は詩の世界に溶け込ん

春光君の「捨てた紙」の句は稚拙の中に君の作家的地位を確保するものである。 繪では描き及ばぬ處にスケッチ川柳の要諦があるので、 からいつたスケッチ句は何時の世にも乗られない で あら

ないと思ふ、「それほど此の句がいくのですか」と聞く人があつたその人の味が遺憾なく出てゐるもので、 私は此の味を慕つて久しいが遠く及ばない事を知つて君を心憎い迄に羨望してゐる。 こんな簡單な描寫で、 當底說明出來ない味が出るとは不思議なものだな思ふ。 だがからいつた味は初心者に解說なんかしても當底明らと思ふ。 だがからいつた味は初心者に解說なんかしても當底明らま思ふ。 だがからいつた味は初心者に解說なんかしても當底明らま思ふ。 だがからいつた味は初心者に解説なんかしても當底明られていっている。

詩も亦教外別傳だからである。

「改名の其後も醫者と手が切れず」氣をつけて見てゐると、沒食「改名の其後も醫者と手が切れず」氣をつけて見てゐると、沒食子君も相とった。 こゝに擧げた句なぞも浮薄な人間の弱點を鋭く突いてゐるから、 こゝに擧げた句なぞも浮薄な人間の弱點を鋭く突いてゐるから、 こゝに擧げた句なぞも浮薄な人間の弱點を鋭く突いてゐるから、 こゝに擧げた句なぞも浮薄な人間の弱點を鋭く突いてゐるから、 こゝに擧げた句なぞも浮薄な人間の弱點を鋭く突いてゐるではないですか。

「属託を救ふ心に子をあやし」は新水君としては平常の句であるが、感心事には君の作品に危なげのないものが、毎號よく續けらが、感心事には君の作品に危なげのないものが、毎號よく續けらが、感心事には君の作品に俗意らず、そしてからいふたしかな句を積み上げて行く事も、川柳人として貴い事である。而も知らずを積み上げて行く事も、川柳人として貴い事である。而も知らずを積み上げて行く事も、川柳人として貴い事である。而も知らずと積み上げて行く事も、川柳人としては平常の句であるでは多寡が測り難いであらう。

「履歴書に子の泣譯が泌みるやう」の與三郎君の佳吟のうちに這させられる、 社のスターを目ざす道程にある君の佳吟のうちに這させられる、 社のスターを目ざす道程にある君の佳吟のうちに這たけられる。

の存在を示す佳調である。「すでにはらませて」なんか手に入つた。禿山君の「どうしたらよいか」の句も、近來めき~~と作家禿山

惱みを以つて君と共に闖みたいのである。 出來ても限が向上せねば一所に停頓するからである。 私自身そのられる必要が今迫つてゐる感がないでもない。 凡べて作家は技がものである。だが、 君としてはもつと (新らしい處へ限をつけ

水車君は才の人だ、 武玉川にある様なきりつとした十四字句は水車君の才が生んだものである、 君には才の産物である句が相當多い。 これで老成して來ると益々佳調を辿るであらう事が樂しまれる。

「盂蘭盆會」の青見君の句もどうしても年齢だけは隱せないだら。 そして生活にゆとりのある人に、からいつたユーモアが目にう。 そして生活にゆとりのある人に、からいつたユーモアが目にう。 そして生活にゆとりのある人に、からいつたユーモアが目にう。 そして生活にゆとりのある人に、からいつたユーモアが目にう。 そして生活にゆとりのある人に、からいつたユーモアが目にらい、柳人は自己の作句欲と同時に、 その年齢だけは隱せないだら言。

# 寫眞は

大阪市東區谷町四丁目東市民館橫

川柳雜誌社指定キタムラ寫眞場

電話(東)一七七〇番



# 新 7

# 5

平

光

んだ耳に、奇異な感じを抱かせたもの ベーター 似た半濁音 月 H 附近に聞えるチリンチリンとい 蓋をあけた新装の十合 は、 飛び込 3. T.

問 もが「 \$ 思つたが、それにしては音が短かい。 隣りで母親に手を曳かれて立つてゐたこど 見てらつしやいよ。」 「坊やの立つてるこ」は五階でせらっ 母ちゃん、あれ何の音? 秋だから鈴虫の音でも聞かせてー し無理からぬ質 あ į

たでせらの は通過より ほうら、 v ~ 1 1 31 5チリンほうら、 234 の明減燈をさし示し乍ら、「 近かよつて來たよつて來 6になつて此處

五階 六階 七階 屋上 ね、 が「ハイ、よくわかりました。 デ わかつたでせらっ パート見學は先づ屋上から x :バークからの客を玩具部待つてゐる レベーター 専門店暇さへ 油斷せぬ瞳を横に觸る猪口 豆汽車へ大人が乗りたさうな 通過チリンと鐘の音 あ 」 こどもより、 ればグラス拭 き 僕 の方

> 一階 階 階 店員の 吳服部で男うろくして居 ベビー 應接五寸高 服もう直ぐ僕に子が い床

# 廣告は走 濱 3 田

久 \*

雄

眼をのつそり窓へ持つて行くと森羅萬象盡く 走り過ぎて行きます。 る階級の人々の購買心や好奇心をそより乍ら で思春期の猫の眼を魚眼レンズで覗いた様に 走つてゐます。近くは速く遠くは遅く、まる 宣傳見たいですが、 そして商略戰線上に立ち並ぶ廣告があらゆ 冬は秋は夏は春は省電に乗って、 讀むものもないもの憂 鐵道省

ろしい三人でも結構です。一人が鉛筆と紙と 車べ 到底一人では手が廻り兼ねます。二人でもよ つたことです。大阪-三宮間二十五分です。 らさず書いて行つたらおもろいやろなあと思 0 を用意して耳の穴を思ひ切り擴げてゐると發 中でこの窓から見える廣告の全部を細大漏 ある日のいつもの時間 11 が終 でると 同時 人が叫ぶのです。 にふつと省電の急行

四階

なんぼでも

あります毛布積み重

ね

!」新與いふたらどんな字やなんて尋ねる様 では間に合ひません。目的物は全速力ですか ら。「白洋舎!」「關西ペイント!」「二ツ井 ドガこし!」「グリコ!」「山中温泉」「リん病 にリベール!」「スキー毛糸!」「赤玉ボート

I

アスピリン」「銘酒白雪!」「新與

へから

L

物好きな車中の人が手傳ひに來て哭れませ う。有限です。決して無盡藏ではありません う。有限です。決して無盡藏ではありません 。 禁によつて、線路の兩側を見渡して得た妙な 値打のある様な無い様なモデルノロジオ。 さてそれを何に使ふか?それは未だ考へて るません。

### バスで拾つた話

平

與

郎

はないの 大幹線の市 チキで か 1) 青バスがサー 0 れ あったところで、 バス は 難波を出て梅田へ着くまでの三分ば バスの方が空いてゐる車に間違ひ 中 0 ビス的で市バス 話であ 大阪の るの 南北を走る二 が官僚の高慢

終日事務に疲れた足をバスのステップに運終日事務に疲れた足をバスのステップに運になつとホットする。

韶所へ停車した。

金光教會の歸りらしい五十過ぎの立派な服装のお婆さんが七つ位の子供を抱いて乗つて をある姿さんが七つ位の子供を抱いて乗つて でむやうに一人々々の顔を凝視め出した。 立上らうとする私は不愉快な不遜なお婆さんの目と出喰してしまつたトタンにベツタリ

席を譲る事を止めにした。 ・が私と同じ氣持になつたか席を立つ人がない、最近厚かましい老人の特に女の、車内のい、最近厚かましい老人の特に女の、車内のい、最近厚かましい老人の特に女の、車内のい、最近厚かました。

へ切つた。

給へと云ふ聲がバス一杯に滿ちた氣持がした 道く癇癪の青筋が出て舌打ちをした事を私は 道く癇癪の青筋が出て舌打ちをした事を私は が、ひよろくくと老婆は跄踉く一瞬眉に非

> たの 外國 社 0 たっ に一寸手をかけて嬉しそうに會釋をして吳れ 引つ張つて僕と席を替つた。少年は帽子の なれない。 國 と誰かの立つのを待つてゐる樣子だつだ。 つ持つて立ちはだかつた。片方の鞄を下ろす 瞳を持つた妙齢の外國人がスーツケースを二 快になつて來た。次の停留所で朝日 私 えてゐる夜學生に氣がつくと私は制服の腕を K 鞄をペチャンと僕の足許 らしい人々で一 は情に脆 ならともかく、女尊男卑に間の遠い日本人 は何だか一人も席を譲らない事が却 バスはグイと渡邊橋の北詰のカー 外國婦人は今度は諦めたやうにもら一つ の美人の瞳なんかに腰を上げる氣持にも 其の隣に辨當箱と大きな荷物を抱 いところはあつても、 杯になった私の前 へ落すやらに置 脈もな ビル ・ブを左 つて愉 の退

### 街に住めば

### 高橋かほる

手―。木―。 氣―。 どうしてもこない云ふ を何んやせはしないやつばりそうごと云ふ方 と何んやせはしないやつばりそうごと云ふ方 との耳に新裝の十合をそごう。と云はれる

### 川柳社交傳

### 安川久流美

大阪 七百 様なら」をしたの 僕は斯う あれから早満 から富山 # 日」なんて 嘆息し 行 0 は 時 汽 一ケ 車に 間 年に 昨 は 乗っ 英 年 や迦に なっ 0 て、 十月 たん 短 半 路郎 B だっ × で 氏 0 あ だ

時間、 走 事 友 小務所 枚書き残 玉 造 0 4 支部の句會で初對 白 柳子 主 人 から や、 0 路郎氏 お馴染連と 小 短 松園 册をたの とタ 君 面 顔を合 から " 0 ま 樂氏、 1 九 名 て「秋 刺を -+ た催 梅 鬼 田 頂 いた 丸、 驛 か 旬

かも知れぬが今も禁酒して居る。又かとい

3.

1) 謂「宮仕 何度 か 10 よっ 强人、 H へ」がまはつて來ぬの の禁酒ですかと立ち話 未だ老眼にもなら 笑はせて吳れるナ、 か やら 秋風 だが、 は 40

3 は寐て待て」 きた×× ボ 働く ヤリ П して を 探 × の元 L ねると ×上りには却々誂え向きの仕 てゐる、 酸時代ではない、 枇杷の 居るんだが 花が 唉 くく、 不惑を す ベかか 「果

| 其處でつれん~に駄句を書きとめ事が見當らない。

てゐる。

秋 爪 中央 き ひ そや 立てム 0 は 足 p 蟹 鹼 俯 袋 向 狩 書 + か が 力 電 野 0 3 K 動 る 7 菊 電 事 秋 1 燈 は 姐 寐 氣 第 廊 E 釜 + 板 洗 下 る ケ げ K 子 る 3. 0 0 0 折 秋 手 社 を き 厨 秋 0 7 時 内 直 當 交 深 か あ -}-3 1) 慷 6 3 雨 職

### 数びは續く

わ

を

+ 御調度 H • += 0 0 月 K ~ 2 ٣ 7 結 ノ !!! 婚 才 1 パレ ンド は續

を引受けてゐる。(一〇、一五日 こうし 0 れば今の か 晴 姑 E つたか知ら 人盡報 7 九 れ , でよ た鹽梅で私の會社 K 親とし 買ふの 0 御 音樂に んが 一撰定に して内 だからとは 兎 は合 每 ich に角讃め は 御堪 座 有 6 有 頂 嬢 は只 1) 誰 天 0 能 意志尊 難ら とは 0 て L 今 \$ 御 杨 御 Ti. 0 有 け 出 樣、 組 座 重 ば たか 皇を勸 よ 0 ま 折 婚 出 0 す 角 む な 禮

### 椽に立ちて

### 平井節

子

於 L ますっ 思ひ ま 私 は味 + 出 淋 3 0 T 0 氣 な虫 來ますっ か よりも哀愁 遠 0 聲 一に誘 母 0 秋をこよなく愛 0 は 臨 九 終 椽側に 0 事

抱いて歸る秋のS 驛の畑 の上で息を引きとつてい から幾何もなくて母は冷 亂 寫して附添の小母さんに譽められた事、それ學校の宿題の圖畵に母の寢顏をクレオン畵に 髪を梳かし、力ない聲で大變母に叱られた事 7 とら幾何もなくて母は遂々病院の白いベット れてゐた。 ス 上で息を引きとつていった。 髪をいぢる事の好きだつた私は高熱の母 十月の靜かな靜かな郊外 E 弱 2 しく芒の の棚には母 月に満 樣 にうらぶれて 0 母の好き 城 院 0 東 まの 妹 の 一 唉 3 た を 生

て思ひ出を語る母の喜びに浸る日は虚くして思ひ出を語る母の喜びに浸る日は虚くしてこれからの幾年を子を抱しまった今の私が劇中の人の 人の 50 淋しそうな姿等が走馬燈 の亡き後 は 叔 母 0 家 K やら 0 いやうに れ T 2 思ひ た ない様出

コ母哀お れしみにふれ涙なれるかげに幾度は あらば スモスの散るともなれば母 げ母 の命日十月上の命日十月上 皺の ひみせ 兩 手ま んこの いとする姉妹 H を継 せ な 2

類

題

評 釋

未

3

"

1.

JII

柳

全

册

同

+

H

#### 大 萍 III 111 III 柳 汽 團 飴 +: 2 IE. 柳 柳 太 坊 陰 珍 句 集 柳 擬 大 團 刀 筒 附 井 JII 繪 第 筒 111 1/2 寶 文 柳 0 作法 改 題 次 そ 招 珠 字 笛 柳 探 子 0 第 第 全 第 谷 全 全 刊 0 九 册 號 號 册 號 號 册 同 同 同 同 同 同 同 同 十明 治 -L -L -L Ŧi. Ti. Ti. + 月 月 月 -6 L 月 月 月 月 + + + 月 + 年 Hi. + + 癸 Hi. Hi. Ti. 月未 H H H H H H H H 變京 鳥 取 取 取 取 菊東 倍北 枝京 八東 以大 一正兵 ツ福 百東 狂東 吉京 〇京 华京、 判海 下阪 等都 號十庫 折井 句京 頁、下 六道 縣 末 大二縣 四縣 0 成 不調江戶 真膽、振 頁、質 五四 第三 米 人京 正年武 劍神 あ日 儿 古谷 〇谷 三條 子 々都 七十庫 突田 る本 頁。角 句區 休國 卷寺 休堀 編川 年二郡 休港 坊橋 が橋 刊大期版 に茅 刊追 第町 山 輯柳 四月西 刊川 一個 の本 註町 新町 期分 社 月廿須 期崎 編町 九東陰 川通 柳 解二 聞三 不 號入 川 不川 發 第日磨 不三 み朝 柳四 雜六誌 に藤 をの 明萍 柳 明柳 行、 七第下 明六 し野 誌 一丁 島 號六今で十池 上目 入十 111 て井社 社: 船 も書 出出文 柳 れ四 柳社 終方 發 發 四 木夢 の店 稱四 刊鼎行 終號神 `酸 行、 + して内 書 も其 拔堂 發 表行、 JII 號 で戸 考 行、 柳社 を 戏書 4 麻 終川 方 の水 紙に近 居藤 0 刊柳 堂 店 紙 以 JII 生 る加る我 (第バ 柳汽 發 發 河 發判 卷 路 柳藤 **处**行、 行、 終 行、 內 郎 + の韶 生 刊、 岐 - 3 笛 絶ン 板、 八 編 最 矢 菊 頁、 科、 次會 會 坊 野 編 4 藤 は、 發 者、 L: [74] 裁、 行、 JII = 輯 他 菊 本 大四 六 丸 人 h 飨 末 11-福 正六 菊 4 者、 途 坊 發 [24] 造、 六判 四 半 截

年八

十頁、

第大

六

倍

判

截

七六

九

頁、

八

號

後

藤

行

[4]

六

IE.

世

編

菊牛

中

菊

判

			_					_	_	_			_			
ŀ	百	共	紫	Щ	紙	縮	猫	Щ	鏑	Щ	Щ	靑	舞	狂	4	莒
				柳		刷川柳		柳	矢	柳	柳			歌	ち	清革
۲	萬		草	須		や		六	テッ			龍		Ł		(蔦雄
				磨		なぎ	•	文	シ改	忍	生			Щ	0	句集卷
ラ	石	鳴	紙	籬	衣	柳	車	錢	題)	路	娘	刀	姫	柳	<	0 -
七月	第	第	第	全	第	全	第一	第	創	第	第	第		全	第	全一
號	號	號	號	册	號	册	號	號	刊	號	號	號		册	號	加于
同	同四	同四	同	同	同	同	同	一大	同	同	同	同		同	同	同
七月	月二十	月二十	四月十	三月	二月	月二十	一月	正八年一	-1-	十月	九月廿五	九月十	九月	八月廿	八月	七月廿
<u>H</u>	五田	五日	五日)	五日	十日)	五日	五日)	日末)	月	十日)	五日)	六日)	H	出	<del>H</del>	E H
が栗編、一號も休刊號も末調都府下綾部町トビラ詩社發行發行	四に六十五號は大正十川柳社發行、菊判、	八月四號を出し終刊、大正三年三號で終りし「復活」の改題再現東京、牛込區揚場町現代川柳社發行、四六判十六頁、六月二號	京、神田紫草紙社發行、菊判、ぎん坊活躍	(大正八年一月五日縊死)の追悼號東京、川柳松枝會發行、久良岐氏、催四六判八頁、松井須磨子	馬場線天	至十二編を收む、四六半截三四四頁京、日本橋區數寄屋町明文館發行、一輯二輯合收、柳	刊期不明、猫車は四國の山間で坂道に重荷を押す一輪川縣觀膏寺町上市、南海川柳社發行、半紙判活版三十	正十年八月十日第二號發行、十一號まで謄寫版式で印行野縣小縣郡上田町四七一九、六文錢川柳社發行、菊判三	二、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一	1年1月1日   1日   1日   1日   1日   1日   1日   1日	<b>截型ニッ折</b>	眼町、	等の綜合誌、休刊期不明等の綜合誌、休刊期不明	叢書の一として出づ 東京、神田科外教育叢書刊行會發行、同刊行會編輯部編纂、同	寺森、みちのく吟社發行、謄寫版、翌年四月より活版、大正九寺森、みちのく吟社發行、謄寫版、翌年四月より活版、大正九	る、日附等一切不記岐一の盡力、表紙に登り鯉の畵萍川柳社發行、菊半廿六頁、蔦雄の句六一三を六號で詰めてあ

	表平核	(Colital)	後以治	391												
	臥	番	Щ	2	灰	娘女	嫰	川柳	燭	不	當	た	Щ	田代	かき	後
			柳			廟(にやん		六文錢(川			世	力。	柳を	华僧坊三	松葉(安	o T
-			柿	Ŋ	和	にやん		柳真田			新柳	を	作る	十週年記	川久流	薬
	牛	茶	(第一次)	7	樂	みよう)	薬	二代記)			樽	カ.	人に	念奉額川	美句集)	柳
	第	第	第	第	第	第	py	全	第	pg	全	創	全	柳	全	
	號	號	號	一號	一號	號		册	號	o +	册	刊號	一册	全一册	册	0 1
	(iii	同	同	(同	(同	- <del>-</del> <del>-</del> <del>-</del> <del>-</del> <del>-</del> <del>-</del> <del>-</del> <del>-</del> - <del>-</del> <del>-</del> - <del>-</del>	同	同	同	同	元大	分	同	同	同	同
1	E	=		月	月	正月九	+ =	十二	+	-1-	月正	二正	八	八	七月	六
ı	月十	月五	=	二十二	= +	一年	日二五	月二十	月十	月八	二年十五	月年一戊	月二十	月十五	二十五	月十五
1	H	H	月	五月)	六月)	日申	E H	H	H	H	日未	日午	H	H	H	Ü H
	函館市大森町廿六、越前青流子方臥牛吟社發行、四六橫六頁	非賣品, 体刊期未調 非賣品, 体刊期未調	同年九月八號を出して休刊東京、神田明神開華樓內、柿吟社發行、謄寫版和紙中本六枚、東京、神田明神開華樓內、柿吟社發行、謄寫版和紙中本六枚、	石川縣鶴來町本町、衙吟社發行、四六判六頁、休刊期不明	月二日刊行、五號にて廢刊 東京、京橋區川柳喜良久社發行、四六判袋綴十二頁、二號は五	八月の第九號で休刊、蓮、幼稚園、紅柳と改題したもの、後身大連市磐城町九三、大連川柳會發行、半紙判廿頁、大正十一年	四六判六頁、休刊期不明四六判六頁、休刊期不明四六判六頁、休刊期不明	る、昭和六年一月六日再版刊行す 上田の島飯花月著及發行、單行本小册子、柳誌の六文錢とは異	京都市下京區多田孤川方、一路社發行、袖珍型、後菊判となる	六判廿四頁、大正九年三月休刊  詩岡市傳馬町一七二、不二雅友會本部發行、食糧評論附錄、四	七年以來の所産で大正柳多留の姉妹篇、三五判三六〇頁東京、四谷區舟町三六、忠文堂書店、きん坊矢野正世著、大正	岡市、高岡川柳會發行、六橋南藤濱	表紙に柳のある夜の川岸風景を扱つてある東京、牛込南北社發行、井上劍花坊著、大形菊半截二〇八頁、東京、牛込南北社發行、井上劍花坊著、大形菊半截二〇八頁、	九頁	四頁四頁	、麻生路郎編輯、休刊期不明、二は七月、三は八月阪市外萩の茶屋三日路六六三、後の葉柳發行所發行

# 日本名所名物川柳

四

國

0

卷

前田五健選並

畵

### 松山城

む 天 オ 15 石 守 鎚 B な 甍 大 を 1 5 Ш 0 街 打 は 0 町 1: 0 山 暗 を 0 緒 0 た 見 九 樣 聞 天 る K T カン さ 文 守 天 75 鳴 礼 守 字 閣 1) る る 彩 柳 文 都

城取大

砲

は

留

築 煙

史

0

鎧

武崖

者

が

出

7

來 象

3

な

りらげ

筒

井

[17]

心

府女柳

松お

石太天

0

太

され

印ば

5 付

け

れら

るれ

滿垂

鼓 主 城 突 山 圍

FF

潜

天

守

見

Ŀ

天

閣

ち 111 城 守 Ш Ш 守 龜 \$ 龜 城 城 城 力 水 は カン カン 城 上 6 6 7 ~ な 6 \* 7. E 城 練 指 汗 L 城 見 規 b Ш 九 3 カン + 0 兵 松 1) 0 今 東 ば す V 0 場 111 道 伊 仰 な H 松 T 力。 後 豫 城 げ 寺 0 \$ 0 佳 6 0 は ば \$ あ 4 0 關 天 慕 花 果 教 る 燒 6 花 Ł 0 0 H 九 景 0 樹 とき ころ 霞 111 色 聲 る る 田丁 闌 碧 11 曉 薬 輝 同 同 大 木 樓 光 履 枝 111 魚 童 親

泡 風 石 庫 逸

春松天金打金

松

健

松 榮 + 或 松 天 下 松 松 松 松 車 成 山 轉 变 守 車 Ш Ш Ш 程 Ш 窓 Ŧi. Ш 城 ~ 0 城 カン 城 城 城 Ł 用 精 自 0 萬 避 力。 伊 井 ボ 井 伊 今 6 意 伊 暑 豫 戶 F 臍 豫 豫 1 5 石 6 松 世 銳\* \$ を 路 は Ш 1 0 ~ 12 0 0 松 避 句 吟 國 眞 松 無 Ł Ł 名 映 健 深 重 寒 111 さ 云 松 所 0 下 默 兒 資 Ш \$ 3. IC to 城 を 石 Ш 0 0 城 な 要 0 景 城 取 月 覗 Ł 0 6 0 H き 城 松 が t IC が 卷 天 白 82 込 な カン 3 高 あ 見 山 曲 丸 守 Ł 5 1) 雲 7> 城 閣 b b 九 3 2 所 不 小 大 T 彩 JL 4 柳 亂 Fi. 宵 曉 JL 代波 人忘

灭

映 水 樓 樓

松山

城

0

槪

泡 童 天

築

城

0

由

緣

ナ

七 逸

3

で

聞

か さ

礼

3

九

紫

香

樓

明

慶長 巍 城。 浦 П 十萬の 焼失せしも、 然として聳 生 八年 海 忠知を經て松山隱岐守、 拔四 都市 賤 百 ケ岳の七本槍の の真ん中に衝つ立つてゐる) 三十尺の 大天守等は舊態のまゝあり、 國寶である 山 上にあり、 加藤嘉明 勢州より 昭 和八年七月 の築城、 古松老杉欝として、 來封、 後ち改姓久松家居 嘉明會津轉封後、 現 九 在松山公園、 H 小天守閣其 天守 他 閣 人



#### 北 莊 窓

山 本 雨 迷

時であると思ふ。句にしても、そうした思想 の豐かな時には泉の如くに句作が出來ると思 ふのである。 ものがよく書ける時は、よく讀書の出來る

秋はそうした意味で惠ぐみ多き時候だと思

藝術家として、あくまで情質的に人選をされ もつてゐたことにも原因があるが、川柳人は と劣つて響くのも致しかたがなからう。 は以つての外で、あれでは川柳の味ひが敷段 披講にしても選者自身がやらずに終つたなど その上、全國放送の名にそくはない内容を 今回の全國川柳放送は完く不評であった。

ると思ふと恥づかしい氣持である。 かりで、川柳人である我々は如斯大先輩があ 明治時代の川柳の革新功勞者であるといつ

殺以上のものを感じる。大體久良岐翁自身に であった。 講演は之れに一層のシンニュウをかけたもの は從來より苦々しい事が多かつたが、今回の た敬意なども、あの御自慢話を聞くだけで相

×

と感じる。氷原は徒眠數年復活の聲聞くのみ あくまで立たねばならぬのは、新興川柳人だ 流として柳界に擴ろがつて行くものと思ふが しさを感じる。しかしその流れはあくまで底 興川柳誌が送次解消して行くことは一抹の淋 た時に廢刊した方がよかつたようである。新 川柳人が廢刊になった、あれは劍師が逝

#### 則が 神 無月話題

订高 史し

#### 或 調 查

が自覺すれば何にも調査員がなくとも立派に 國勢調査が行はれる筈だが つになつても消えないとは情けない。皆んな なかつたのだらう。榮職にまつはる矛盾はい 人を煩す迄に何故その件を調査員にしてやら たのは他の見る目も氣毒に映つた。こんな老 たるかを教はり、 れた一人で、 或る老調査員は所謂町内 その老人は伜に國勢調査の 件のお供で戶別を訪ねてゐ 0 お顔とかで學 T 何

國調へその夜故郷の母が 國調の夜を 廓 國調へまだ日 國勢調査家出した娘の歳に觸れ 國調へお妾さんの 下書きの通りでよいと調 本 歲 か 2 查 居 な 產 知 7 1 國 員 與二 不 史 同 同 郎 柳 B 光

#### 膓 7 ス

所もあらうに、 南の法善寺でお多福の店

講演そのものよりも御自慢話しが耳に残るば

るべきではない、先づ久良岐翁の講演などは

\$ の話であるが、 刊に發奮されて より他 置かぬと過去の苦戰は一朝にして水泡となる のである。 り、 は全滅となったが、よって何かを纏めて はないであらう。信子さんが川柳人廢 今また川 之れなどは是非成功させたい 獨力「火箭」を創刊されると 柳人の廢刊を知 る、 新興川

好感ものである。 々によつて清新味が れたことで、天邪 それにしても、 鬼、 JII 地 帶 が横濱から發刊さ

多少によって 0) で、盆々盛んなる新鮮味が加へられて、 期待が持たれてゐることは、柳誌が頁數の 方古い柳人紫痴郎 評價されてゐないことを物語 氏 0 の村」には出

×

三太郎氏などはよい映畵は見逃がさず觀賞しが、映畵を觀賞出來ることは幸福だと思ふ。 層よいものにするだらう。 態度が新鮮で、純情であることは、 なく嬉れしくなつてしまふ。 と句を發表されてゐるのに接すると、 てあられるらしく、未完成交響樂を見てなど 映畵と川 柳とは何 0) 連撃もな 映畵を観賞する いことである 映畵を一 たまら

術映畵が多くなつて來た。 映畵といつても輓近の映畵には見逃せぬ藝

の「妻よバ 日本ものでも仲々よいものがある。 ラ の様に」などは全體を通じて P 魅 C L

> られぬ日本個有の親しい山川が展開があった。分けて背景からの實感は 「別れの曲」などよい映畵であった。 を學げてゐた、洋畵では遠くは「裏町 分けて背景からの實感は洋畵に見 藝術 して效果 ご近くは

本の熱望せるところだと思ふ。 よい日本映畵が現はれることは、

態度は新鮮味があったし、總でが感覺的 つたので非常に面白く聴いた。 6 旦つ で聴くものにも古川柳に就いての其の日のいて講演された。丁度川柳忌の日であつた 句 會 の席上東魚氏が古柳書の研究

の就

あった。 人が古川柳から放れて行かうとしつ、あるのたことは大きな土産であった。 近代の川柳たことは大きな土産であった。 近代の川柳とする者のよい手引を與へられ、古句に就い 盡きないものであつたが、益するところが多我々に對してゐられたので、興味は何時迄も 時、斯うし 到らなかつたけれども、古川柳を研究しやう かつたことを感謝せずにはゐられなかつた。 古川柳の精神的な方面には時間 東魚氏の講演は先づ材料の豊富さを以つ た講演を聴くのは嬉 れしい の関係から もので

古川 0) などは此の部類に属する方で、勉強が足り は何時 然るに現實は益々古川柳より遠ざかり行き のだと決めてはゐるが、興味の起り 柳を忘れて行かうとするのは何故か、 の日かと思つてゐるのである。 出 な僕

> 御 3 0 1 話 H 話。 て百花競 -1 0 0 したテ豆を食つた が豆を食つたば れたとは秋なら 1 お腹を慄然とさし 種にも 0 妓 ふ百五 が熱で寢 なら ない かり ぬうらぶれ + お多 人 るとそ が、 に、 0 た 女給 事 嘸 福 ナレ が腐 れ だららっ カン た淋 言さんが 人も が L を毀 又 當 L チフ H ~檢便 赤 L チフスを 0 ハスと 南地 玉の お たとは を取 客 判 v

丰

+

×

V

1

赤

親類が水くさく 信用と別にチ 大改造チフス出たとは書 ラチフス無料注射へ熟を出 フ 、なる膓 スは流行るなり チ いて 7 なし ス 汀 史 與 郎 呂

燈 水 制

す。 影も 草に灯をつ 道 オレ お られし やめ 頓 もう遅お 寄り 堀 やす」と云ふ妻の京都辯を振り切つて 添ふて」に 0 出て見れ 團 服 It 反對で、 す ると「おたばこ御 0 0 × に ば、 ガ 今将 水 散 燈火管制見學なんか、 大 0 あ ば 道 てら か 頓堀 ij 遠遠 は れ 満月さへも 一られ 自 ね 暴に が ひま L 煙 中 忘

管制にはや寢るとせう若 サー チライト へ立ち止まり 夫 婦 汀 史 B



りどころなし

金 井 有 爲

郎

所 路郎先生、警官、他郡衆 縣議選舉の頃 田舎町の四辻

見せて立つてゐる、その傍の掲示板には など三四本の立看枚が秋らしい凉しさを (縣會議員候補者 齋藤政友、少林民政、

> 紙のやらに眼を据えた路郎先生が街頭 ほの白さに浮び出てくる、 草津湯もみ唄などうたふもよし) 午後十時過と思へ、例へば十月號の表 酔器強々の態 0

など色刷のけばくしいお役所のボスタ 「神に誓つて正しい一票」「汚すな一票」 世がさかしまになると 路 名のふつてあるとこがいくぢやないか、 さんの政見に養成して尊い一票を設する が立つてるぢやないか、ナニ、サイトウ マサトモか成程お金持の齋藤さんか、假 といふ事もあり得るからなアハ、こ 「オヤ、コレワー 馬鹿に候補を諸君 、、漢字の讀めぬやうな人間も、齋藤

> 文 拂

管制へすしや不自由な灯で握り 管制へ今年も大きな月が

出 る

與三郎 於

光

常に人を欺きて賣るの罪を拂ふ行事の答だけ 世の中も世智辛くなつたもの、誓文拂とは、 で最もパーセンテイジのい」ときかされては れど……(史 よく賣れるのは最低價格品、それがそこの店 戦術だらうと知る由もない、何處の店も最も れるであらうが、それがさるデバートの廣告 れて泣き出す子供は風船玉でわけもなら掛さ く商店の赤札が頻りと誘惑する、人波にもま の手が重なり合ふ、そうした風景は見られな に赤豫面白可笑しく賣出の聲に和して女房連 るが、誓文拂ひの雜沓には全く参る、赤鉢 いまでも、女連の購買心にはは何等關りも 日一度は通らねば納まらない我橋では、

7 (於まん朝 歸

財布落して菅文拂 誓文拂臨時 店 員 普文が済んで値札をつけ替へる 誓文拂埃りを云ふて足袋をぬぎ

聯

から

涸

買ひすぎた誓文拂

0)

歸

り道

柳

與三郎

光

得てこういふ皮肉な場面が見える。

が貼つてある、

警官來かるるの

路「や、これは警官君、大いに御苦勞、僕 警「オイ、君、君立看板へ寄りかくつもや 醉つちゃつてね、すまんが水を一杯」 いかんネ、オイ君!!

警「水なら宅へ歸つてのみ給へ」

路「宅?宅つてふとキングですね、そうす ると君、キングまで何丁ある?」

警「キングつて何かね?」

路「オイ警官君、君キング知らんかね、キ 洞主人に水の一杯位振舞つてもいくだら どうも近頃の警察官は不親切だよ、不朽 オイ君、警官君……あれ行つちまつた ングは不朽洞だよ、おぼえて置き給へ、

匹の犬らさん臭さらに出て來て立看板の

路「や、勇敢な犬だよ君は、偉大な犬だよ つへ小便をかけて去る。 オイ、シロくくあれ逃げちやつた、

> 犬しきりに吹えて夜更ける。 あるこそもつけの幸 ようし吾輩もいく考へがあるぞ、矢立の

30 翌朝、同じ場所、小僧さん、サラリーマ ンなど十数人集つて何事か話し合つてゐ

甲「何ですね一體

甲「をかしなポスター?」 乙「をかしなボスターが貼つてあるんです

る「こんな事すれや選擧遠反だらう」 丙「これや誰かの悪戯でせうね」

丁「さア、遠反になるかなア」 乙「それにしても蓬筆に書いてあるぢやあ りませんかし

赤心一票やリどころなしか

同(くすぐつたそうに)「アハ、、、

香、

落 穗

で御別れの宴を催した。 される機見女さんを前夜戎橋の紅瞰光に関ん 十月五日午後四時の天保山發の汽船で歸郷

別れに際して光耀會に御力あった機見女さん んの睫毛にも感激の露が溢れてゐられた。御 た。路郎先生御夫妻の送別の言葉に機見女さ 歸鄉は川柳の道の發展ではなかららかと思つ 粒の籾地に落ちて一寧ろ機見女さんの高知御 芽生へて行くかのやうに思へてならない、一 られる。私はその後へすくくと川柳の稻が の支那料理に舌皷を打つて散會した。當夜御 の御謙譲な御答への言葉があり、色とりん 機見女さんが川柳の一線を引いて高知へ歸

忙しいのに御参會下さつた御氏名は 路郎先生御夫妻、汀柳、 與三郎、艸樂、機見女さんの十五名 綠雨、鶴峰、 史呂、 **亂耽、丹路、世間** 雨迷、みつる、豆 次第不同(與



## 世不通漫談

四

#### 梅

出て、陽兵衞は九世團十郎、墨染は五世菊 出て、陽兵衞は九世團十郎、墨染は五世菊 五郎、小町姫が菊之助で、當時の劇評家達 は、これを大陽の扉と稱へて激賞したが、 浄瑠璃の太夫は林中で、滿都の評判になつ た。

『家元の芝金が、小唄の跋扈に對抗するつも

三途河の奪衣婆和尚

○俺は演劇といふものを看始めてから、六十餘年になるが、其間にあの隣の扉ほど、結構至極な所作事は、前にも後にも看たことが無い。一は豪岩一は凄艷、兩々相對してが無い。一は豪岩一は凄艷、兩々相對してが無なの極致といふのは、斯の始きものだと思つた。

〇夫れよりも感心が出來ないのは、はア小唄

却するもので、俺にはどうも感心が出來ぬ新作を發表するが、あれは端唄の特色を沒り敷、在來の端唄の四五倍も文句の長い、

り、足を小刻みにばた⟨⟨と行く後から、ちの、手管の諸譯、裏茶屋ばいりの魂瞻迄との、手管の諸譯、裏茶屋ばいりの魂瞻迄との、手管の諸譯、裏茶屋ばいりの魂瞻迄との、手管の諸譯、裏茶屋ばいりの魂瞻迄と、底

一前に常盤津の話が出たが、明治時代には、

持に成つて了つた。

デオで日夜放送されるので俺は其爲に頭痛るから、肥料の臭氣が芬々する。それをラ人であり、作曲者も地方出の藝妓などであとかいふ奴だね、あれは作詞家も地方出の

うであつた。明治三十三年二月に、東京の夫が居た。其中でも林中は、殊に美音のや小文字、文中、林中などゝいふ、上手な太

本

塵山山

開兵衞が菅笠を棒の先に附けて、それを右 の肩に擔いで、大勝にのつしく〜と歩き、 二人が花道の七三へ行つて止り、しゃんと 立つて極つた立姿は、口にも言はれず筆に 立つて極つた立姿は、口にも言はれず筆に 立つて極つた立姿は、口にも言はれず筆に がを打つたやうに鎮まつた、さうして此れ 水を打つたやうに鎮まつた、さうして此れ 水を打つたやうに鎮まった、さうして此れ

○俺も其後に幾度か、この所作事を看たけれ ども、團菊兩優に及ぶ者に出合はない。た とひ技藝は優秀であつても、歌舞伎劇獨特 の滋味とでもいふ可きものが、全く缺けて の滋味とでもいふ可きものが、全く缺けて 居て潤ひが無く、看てゐて滿足する事が出 來ないのだ。

藝術の極至を現出したのであるが、常盤津の扇の扇の扉は、関菊兩優の妙技に據つて、

○今の常盤津の太夫の中には、林中のやうに 上手であつて、天性美音の者は無いやうだ 上野であつて、天性美音の者は無いやうだ 常盤津には限らず、他の淨瑠璃でも何でも 一派を統率する主將格の人の、技藝が優秀

の林中の名技を加へて、三絶を賞揚すべき

1:0

べ美音といへば、明治時代の芝居に出た、先代の松永和風のやうな、美音の人は他に類が無いね、あの人が芝居の中で諷つてゐる。 一然し樂屋の評判に據ると、和風は初めに清 元を修行したが、中途で長唄に轉向したも のだから、前の清元の癖がをりく、出る、 といふ事であつた。それにしてもあの美音 は、近代無雙と稱すべきだよ。

○現代の和風は、先代と全く反對で、チューブ入の齒磨を押出すやうな蘼で、何だか苦ブ入の齒磨を押出すやうな蘼で、何だか苦ずる時に、野虚が悪い、とならに聽えるね。 「素付伊十郎は、整量が悪富であり、また上手であつて、「物進帳」などを演ずる時に、なって、 本重な美音が聴かれなく成つた。

> ○近頃、杵屋佐吉といふ男が、英迦に大きな 三味線を作り、而して門弟を二三十人も集 されは西洋の音樂が流行するので、夫れに 動抗するつもりであらうが、たとひ八疊敷 を作り、それに井戸綱のやうな糸を懸けて彈くとも、西津の樂器に優る をうな、高音は出せないから、あの企ては 配をひつて尻つぼめと云ふ俗諺の如く、遂

一共の道の人となつたら、西洋音樂の跋扈を 財視してある事が出来ぬであらうが、長唄 はやはり従来の、細棹の三味線を用ひて、 時世に適合するやうに努めて、進步發達を 時世に適合するやうに努めて、進步發達を 時世に適合するやうに努めて、進步發達を 時世に適合するやうに努めて、進少登達を は立花家橘之助と、夫の橋の圓であつて、 は立花家橘之助と、夫の橋の圓であつて、 は立花家橘之助と、夫の橋の圓であつて、 だうして來たのかと訊いてみたらば、紙屋 川とかで溺死したとの事で、わたしも二人 の災難に同情して、いろく〜慰めて造つた の災難に同情して、いろく〜慰めて造つた がら年寄の婆さんが、アベックなんで新語を 使ふやうでは、冥土も大分近代化したらし いる。

○寄席藝人で終ったけれども、浮世節の一派けたやうな、顔つきをして居たけれども、まだ妙齢の頃には、諸方の寄席へ出て、その美貌が人氣を集め、あの女の掛る寄席はの美貌が人氣を集め、あの女の掛る寄席はである。

「橋之助が年増になつてから、相撲の常陸山の一部では巧妙であつた。然し偶々長唄の弾などは巧妙であつた。然し偶々長唄の弾などは巧妙であつた。然し偶々長唄の弾などは巧妙であつた。然し偶々長唄の神を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始して、その家元となり、三味線の曲を創始している。

一あの女の人氣が旺盛であった頃、 れどもこれは他日に譲る事とする。 支那の子期の故事のやらな、逸話が有るけ の後に没落して仕まつた。お後といふ女は 派を語り出して、本名のしめに壽の字を加 に仕込まれたので、後年、春柳節といふ一 で、淨瑠璃を語つた而已であつた。其の母師匠でも無く、偶々大名邸の奥殿に招かれる。 元の名手であったけれども、寄席藝人でも 勢屋重兵衞の孫で、實母をお俊といひ、 名を記憶して者は、今有るまいと思ふ。 壽といふのが、諸所の寄席へ出たが、此の つたので、橘之助程の人氣は無く、 の女は、本郷二丁目の舊幕府献發御用達 つた。容貌は美しかつたが、既に姥櫻であ へ、志女壽と稱して、客席へ出るやらに成 春柳志女 清伊

わたしは能く覺えてゐる。

との艶話が、新聞の三面を脹はした事を、



#### 几 或 · 遍 路路 (其の五

#### 松 Щ 酒 井 樓

高知人士の誇りとする名城で有ると思つた。 代的の花壇、更に俯瞰する染鬱の秀景さすが に公開せられて居る、頂上の天守に配する近 公の居城たりし所で城址は公園と成つて一般 四月八日高知到着 洋花とつくじと城のコントラス 高知は二十四萬石山内

の憧を持つ橋、それがこんなでは と成つて跡形もなし、吁々、旅人として多大 播磨屋橋傳説の播磨屋橋今や都市計畫の犠牲 憧れの傳說 偲 ぶ 影も 都市整理名所古跡をぶつこはし 十景 雨 K 霞 な L

3

居

1)

は探し得たる嬉しさ、濁水先生初め多數の柳 人に御目に掛り、御高競拜聴の榮を得しのみ 播磨屋橋の情景は探れなく共、帆傘川柳社

> 忘れしめ等々謝する辭なしの大恐悦。 の味に味覺を痲痺せしめ、箸拳の興味に時を り、高知銘酒瀧嵐の芳醇に舌燗らさし、酒盃 歡迎の宴を開かれ、大に遍路放れの持成に預 か其夜同市一流の料亭すし柳に於て句會及び 欲む程に酔ふ程に増す無 遠 もら飲めぬ酒へ酒盗の皿を出し 其の味に又一しきり減る 銘 河 慮

かな 四月十三日の拂曉、此の當り海岸一帶は大岩 國靈場中での大難所足摺山に参拜したのが、 かくして日を重ね泊を重ねて土佐の最南端四 眺め、仁淀川の長橋を渡る。 して居れば敷限りも無き士佐の史蹟の敷々を 峰寺の芭蕉の句碑、木枯に岩吹き尖る杉間 や挂濱の坂本龍馬先生の銅像など、記 仁淀川一服をして 0 渡 る 橋

礁寄せては返す仇浪のなんて詩的なものでは

岩を嚙 と時化て土 t 浪 佐の濱邊の超 波 濤 0 塍 跎 岬

雄大なる日の出。 を拔け足摺山へと急ぐ遍路の一行、フト見る 今や午前四時。明けやらぬ夜、深き眠の町 0

ある。 が土佐海遙から洋上吾等の眼界に入つたので あの旭米國を夜 10 L た 太

やがて寸尺間と陽は昇 雄大な旭へ双 以界幾十里先 な 手 3 差 つて來る。 大 L 1: H け 111 る

此の眺め有つて遍路の甲斐があり 詩も歌も繪も及ばな 南無光明遍照 土佐の海どこ 巡 1: 續 佐 4 0 朝 大 企 Ü 砂 子 海

餘りに無慈悲なりと嘆ぜずには居れないので の道場とせられしのみの御心とすれば、そは 言ふ事が只遍路に此處迄足を運ばすべき難行 大師がかくる僻遠の地へ靈場を設けられたと るならんも吾等遍路には問題外、只高祖弘法 國防上に學術上に蹉跎岬は大に研究の價値あ

に接するに當り、初めて大師の眞の御心がハ 有るが此の豪壯雄偉なる土佐海の朝の大壯觀 キリと頷けたので有る。

柳壇の

名 de.

懷

L

0

地

ħ

色

ようお罰が當らなかつた事よと肌を寒くした 占摺であるなど、愚痴つて居たのが勿體なく 言外の御教であらうと思ふと、今迄足摺は手 此の清き心に依つて眞の信仰心を養へよとの のである。 俗塵もなく朝の日へ南無 大 Odi

今更に高組の 德 を 知 る 遍 路

を踏み字和島へ着したのが四月の十六日、字 に入る。 足摺の肚閥に身も心も輕く成つて感伊豫路 松山を出てより正に四十日 再び伊豫の土

先づ四國では金里羅禄に次での御靈殿。 繪馬堂が三つ四つ欲しい和 震 様

和島は十萬石、伊達公の城下和靈神社の有る

京華族會館にて天覽に供したりとの折紙付の 冠したる川柳社がある。日く鹿の子吟社と 地方名物、この古典味豐かなる八ッ鹿の名を 此の市の秋祭とかに出る八ッ鹿踊嘗つて東

ぶりで又櫻の滿聞に會はんとは。

底をして櫻の

永

壽

命

知

1)

この詩命の永い櫻が到る處の神社佛閣に有つ

如何に 旅を續けたくも成るが、それは大それた考、 待して頂くと、遍路がいやに成つて純川柳の 川柳の有難さを泌々と感じる。こう方々で歡 との諺の如く、更に翌日吉田柳界の御厚情、 礼に劣らざる盛會の御歡待、 鹿の子吟社を訪ねたる夜叉もや高知帆傘川柳 川柳に國境なし

ばこそ大師様と同行二人なればこそ 誰れが歡迎して下さらう、遍路ちよう身なれ でも、さうは行かない、川柳のみの旅なれば 遍路ちよう身へ接待が有るのなり 川柳家遠慮を知らぬ 事 極 85

月二十一日琴平櫻の馬場にて賞せし櫻より阿 月二十日、宇和高原にて櫻の滿閉に會ふ、三 して、五里七里の道は平氣々々。かくて宇和 波土佐と到る處に、櫻を賞して茲に 吉田の柳友に送られ、明石寺參拜、時しも四 感遍路も終りに近づくに連れ足感健やかに 櫻 見て又櫻 見て一ケ 13

南無大 日 師櫻

111 柳 所

投 句 集

或 0 卷

PU

選者 前

メ切り -1-月二十 H

四

鳴

PF

道 後 温 ×切 泉 十二月二十 H

Ti.

宛先 本社事務所

用 鄉 ガキに限る

て吾等遍路を慰めてくれ ありがたや櫻へ披れ へ 独 忘 < 礼 鈴 0 な

> 1 音

田

五

健 氏

中中 樂

柳君が 續 にして、 て天氣は晴朗である。 元行機 参集の顔振れは從來の催しと大分趣きを異 いて十月十三日 神地方を中心に行はれた防空演習がまだ 家全部、 路郎主幹 爆 音 が聞えるお天道様は氣を利 翠夢君が母堂と二人連れ、 拂曉目が醒めると、 一家七名の總出を始め、 午前九時前には片町駅 窓近く 多郎君 かし

とで三 を引き 人宛の 僕も娘 夫妻, 葵雨君 員 れ、

滿員で 發車、 亂耽 十三 の都合があるので、 の諸 名、 あるの 四條畷さして、 まだ参加申込はあつたが、 君、 大體家族會の觀を呈して同勢二 九時二 車中は文字通り鮓詰 十二分片町驛を 電車の連

たか、 子は稻さへ珍らしい處に、 で郊外に出る事は樂しい限りである。 て、 車窓の外は色づきそめた稻穂が 「御飯たべるお米の木やなア」と都會の 愈々天高く氣澄む、 からした家族連れ アートちゃんだつ 面に展開

星田村 案内で村を拔け山路に向ふ。 て目を樂ませてくれる。 栗はじけ、 や子供には少々遠く峻険であつたが、 案内をするといふ事で、 I) 翠夢君が紹介者である。 條畷から汽車に乗替へて星田駅に下車の 行けば、 の西井石松さんが今日の松茸山の持主 早い漆の紅葉するものなぞ見られ 千草八千草の花咲き、 道は案外遠く、婦人 そこの娘さんの 今年は妙見山 柿熟れ、 山路を

カ

樣多勢 が子供

3 野草が今を盛りと吹くさまは一入幸福に感じ せたっ をけら、 傍に龍膽、 われもこう、 當藥、 藤袴、 ひよどりばな等の 虎杖、 野菊、 14

> **葭**乃夫人、 者の後に落伍者ある狀態で、 縦とせいらぎを聞きつい、 石松さん娘さんの足には到底つぐけず、 さも苦しそうであるの 増位夫人ほてつた顔に汗が流 行けど登れど その しんがり 落伍

あり、 てんで 多く、 場所が設けてあった。 腹は空いてゐるといふ有様だから、 えてゐる狀態を見せて貰つた滿足した連中が いふ事になったが、 早ら始めやらかい」と云ふ譯で、 二十丁も登つたと思ふ處で、 ンテキ陣を張るの 大體の眼目は否む事と食ふ事にあり。 探さうともせずに寂轉んでゐた連中も みんなで三十本位は採つたであらう。 峻しい山で松茸も少く、 小憩して愈々非 漸く延 五六個所に 本當に生 を

ず、 賞める事を忘れてゐる。 既に腹に少々手ごたへが出來た頃である。 夫人が「よい景色だんな」と言は いふ處だが、 0 脇に土瓶を据えて燗方は一 つたか知れぬ、 頂きだけに河内の平野を伏瞰 からなると道々の被勢なぞはどこへ 汀柳君さすがに愛洒家の本能を發揮して 盃と、 雞肉の少々堅 箸の多忙に誰も 思ひ出 手に引受ける。 い位は苦になら し眺望絶佳 した様に改乃 れた時は、 が景色を 飛び走

脇たる山路、 右は小松林、 左は溪流、 松 参加

は

か

ほる

羊



じて石松さんの家を尋ねてそれから田舎の人 加されたは結構だつたが、汗を拭きながらの じてい 後れ走せに出たといふ言ひ分だがどつちを信 りらし きて見ると徹耽若は一人で出かけたとの事で 言ふし、ひろし君は住田さんは行かれぬつも 曜を誘ひ出すのもと氣を利かして一人來たと るべき筈を、徹耽君は御夫婦の為め折角の日 での應答であつたそうだ。二人連れ立つて來 足に從つてあの峻路を か は 樂なもんや」と報じたそうで、それを信 山の際まで自動車が行くし、 来る。 相當な難行苦行、 ムか知れぬ、 「なんとなるい路どこか、 いと細君の言葉を信じて、ゆつくり起 大阪でみつる君に 今朝徹耿君が誘つた時は床の とも みつる君を恨むまい あれ後れ走せにも参 気に駈登つたとあ 電話した處 ほんまにな 道はなるい 「騾 4

> 大いにメートルを上げ、大いに復を世やし をれでも酒盃に向つてはいつか元氣は恢復し で、とりとめもない放歌高笑がつじく。 んで、とりとめもない放歌高笑がつじく。 んで、とりとめもない放歌高笑がつじく。

遊べた事と思はれる。 動 んだらしいし、土産も渡したし、 し驟前の茶店でかほるさんが相手で一ばい吞 過ぎる。もう陽足はよほど傾 時で氣の毒ではあつたが、 君が登つて來たが、可惜その時は宴を閉 は監視せぬから大阪に歸つても遊べる事 大いにメートルを上げ、大いに腹を肥やし 山を下る。途中で今日の一番遲出の禿山 あまり來やうが遅 いてねた。 その後の行 しか したた は

社近來の快舉であつた。

#### 葭乃

花 ない 0 さまを思ひ浮べながら、 白 0 たっ 床几や田樂茶屋が出たら、 のだんだら暮の 見の場面となるだらう。 星 田 やはらかい草が生えてゐて、 栗の林だ。 の町 から道幅の宏い櫻並木へ 中で大きな重箱を関んでる 面にいが果が落ちてゐた 漸く山陰 村や町 あつらへ向きの 春は緋毛熊 の人達が赤 へ差しか 出た。 處

> りつめた。 りつめた。 りつめた。

さんは燗番係、徹耽さんはやきとり屋のおつさんは燗番係、徹耽さんはやきとり屋のおつさんは燗番係、徹耽さんはやきとり屋のおつさんで、にぎやかだつた。

#### 夢

良な收獲。

正にその名譽を維持したり。 で、氣の早い離耽は鍋をかけてもう食ふた後で、氣の早い離耽は鍋をかけてもう食ふ

行柳子父子、盛んにジャアナリストを發揮 してカメラが機關銃の如く發射され、總勢二 してカメラが機關銃の如く發射され、總勢二 なものへある事は暗室の赤光のみが知つてゐ やう。

さはい様な話です。 ことです。 ことです。



#### 指

婚約が出來てくす

1) Ŧ カ

光

先に力をこめた

手 6

人

0

指 K

3

5

箸

春

指折つて敷えたりないあどけなる

### 募集句

#### 旭 田 啪 選

握りしめた見の爪を剪る指を解す ム方がお待ちですよと指\*立て かめ 節 き 指 3 る 車 る 不二號 喜代次 久米雄 非常兒 TE. 文 と夢 履 庙 H 惚れ 指さし 救濟の 指先に 讀 食 枕蚊帳のぞけば指をす 子の指に 棒紅の指が淋しい嫁きお 3 7 6 事 倦いたキングの上で指が鳴る れた男の指 れ指さくれ ムスビへダイヤの 蚤の命の から 出 誘惑があ 佳 來るか指に聞い見た 世 が太い して戀に生き る ま 3 ふてゐ 指が延び < な な 壁 1) b 3 井乃蛙 文 觀 青 庫月 泉 兒 子 魚 司 酮

僕ちやんの鼻を押 せり市の指一本へ

へるかあ Ħ

が

光

に得心をした

見の

寢

息

指ざして親光團

0

J <

喋

b

水

客

案外に

女車

掌

0

指

太 0

苦闘史を語るに足れる指 目の早い男の指が背をつ 親指で給仕に在否をたし

1

#### 111 柳 家 戸 籍 調 續

### 

雨

名 (2)雅號及別號 (3)生 月 î 二年月

です、 うれん草がのびてゐる(路郎師)、ひとりゐ く見る方) 童話、(10) 只今物色中?、 てゝ十七八の戀もせむ(同)、赤松のみどり ればひとり限りなく淋し(路郎師)、名をす 現在出雲製織會社に勤む、 業かわるルンペン生活の時二三年つどく、 川郡今市町グラウンド、 本籍島根縣安濃郡大田町、 元年十月十五日生、 なんてなものは一句も無之候……これから が僕を生んだ村(山雨樓師)、 (一)山內久藏、 外の趣味(10)配偶者子供の有無 なもの(12)川柳に手を染めた年 先(7)好きな句(8)自信の句 (1)姓 光(7)好きな句(8)自信の句(9)川柳以(4)出生地(5)現住所(6)職業又は勤務 (9)岡案を書く事、讀書、 (2)琴月、 (4)臺灣、臺南の産、 (6)轉變として職 凡愚、 (7)君見給へほ (5)島根縣、 内 (8)自信の句 凡 盛花 (3)大正 思 îì 簸

賤

一、バケツ、盥、と

と漏

る

打

零零る

2 6

[ii]

玄關は傘の雫を切る と 類瓶の最後へ妻は限をみ 茶を入れるコツは一ト年

妻は眼をそ

L

伊

一勢神

宫

石

10

年で

孔

から

あ

吉

丰

一月

[ii] 柳

つと真剣味が欲しく思ふが。要するにうまく ってゐる程度の句は作句の一階梯に過ぎな ッペ 外全没が多く出た。 イを念入りにする 本欄 細 投 何 V 指 0 作 家に 17. 4 秋

#### 前 拔

街 不 露零今朝全 行けるとこ迄行つて零は 年まつ 機嫌 みふ 宿 子から零が落ちるほ 樹 に零が落ちた b な歸宅は帽 零 0 ける窓へ 人の 零 毛にためて强 の穴を見 0 快 戀 下でバ 丽 を 0 滴 岭 待 0 於 散 子 ス 0 を ち どに 步 音 カン 3 3 8 落ちてある となり 待 呆 6 75 力。 た す 4 H ti + b 會 司 泉

### 喜 秋

久米雄 街の子へ雫を落すプラタエプロンの端で雫を拭いて 撒水車零の 天井への 一零白く 天)一ト零さして眼醫者のな洗が つてるもう落ち 水は しどの松も葉尖に零落ちん 匙の零あごから胸 雨木々の雫となつ 术 等氣 零おし Z 光 0 ツリー **零慌はてた髭** 目が少し 一等、子供は叱られ まし またひと年伸を落 0 ぼり湯氣 で仕舞は 相 さらう 階 7 幽 耳 芝居 F が を かい 痛 n < ナ 時の 拭 立風 24 n 22 n 崙喜固 正靈同同同 水同 德同 今同 禿同彩 夢泡柳 = 雨 路 Ш 泡

> 4 先輩ぶる奴」、「人の趣味をけなす奴」、 「病氣」、(巨)昭和六年 ツター句の イカラぶる奴」、「身だしなみを忘れた女 晚秋、 松陽柳壇に

を作る前に人を作らねばならぬ事を痛切に感

術だ詩だと騒くがとこはないのである。

禁

作

家の

獨自

の神經が活動し

て居なければ

旬

通リ三 作りたいと思つて居ます、なし、 氣の付く花が咲き(啞三味)、蚊帳に寝て 端な川柳家、 、の記憶も古びたり(超見)、 六月二十一日、 1 )狩野吉雄、 )探して居ますが當もなし、(11 (6)印刷工、 (448) 一ノ四、 (12)昭和七年八月。 (5)同淀橋區戶塚町三ノ三六 (4)東京市 (2)苦勞人、 研究社、 狩 野 (7)沿級の春を 京橋區月島西仲 (8)せいぜ (3)大正三 苦 勞 (9)讀書 人 1 年 - 53

がさびしいといへり窓の秋(綠之助 新鮮で子守とその子は見飽ず(羅門)ひ 年九月十七日 のダブルベット 簸川郡高松村(6 (12)昭和七年 1)尾添唯清 ンの (9)音樂・劍道 (449) 律動となる汗落ちる(雨迷氏) 夕月は 一月 4 (2)好郎 をのぞかれる(路郎師)エ )農業・土百姓(7)父と子 )簸川平野の眞ただ中(う • 角力(10 天坊龍虎 尾 添 (3)大正三 好 郎 8 とり



### 柳界展望

歡迎する。 数迎する。 世様の御通信をかる様にしたい。皆様の御通信を かる様にしたい。皆様の御通信を がる様にしたい。皆様の御通信を

【大阪】▲關本雅幽君(本社同人)は て有馬(。 「大阪」 本語のはれて、高賣をされる、 郷里山崎へ 適當な場所を物色されてゐるが、近頃 人)は十月 居さる。 ▲庄万よし君(本社同人) 花區玉川町 居さる。 ▲庄万よし君(本社同人) 花區玉川町 居さる。 ▲庄万よし君(本社同人) 花區玉川町 は十月九日伊豆修善寺、十一日多 支部の畔柳 は十月九日伊豆修善寺、十一日多 支部の畔柳 は九月下旬より中毒にて病臥され 和川柳」は は九月下旬より中毒にて病臥され 和川柳」は である。 ▲村松夢裡君(本社同人) 版として誌 である。 本村松夢裡君(本社同人) 版として誌 である。 本村松夢裡君(本社同人) 版として誌

町大字新発五〇七へ轉居。 版として誌代二十銭に改められた 和川柳」は第五號十一月號より菊 牧人の諸氏が出席された。 **亂耽、與三郎、史呂、** され本社より路郎師、 支部の畔柳社大會は十月十日に催 花區玉川町二ノ五三。▲本社大鐵 四國巡禮を了へて歸阪、 石森靜太君(元螢ケ池支部幹事)は 郷里山崎へ同君と共に遊ばる。 人)は十月二十日安井ひろし君の て有馬へ。▲生田翠夢君 新堂喜正君は大阪府豊能郡豊中 綠雨、鮎美 汀柳、艸樂 住所は此 (本社 ▲「昭 同

> 席、十五日歸京された。 本学一回 家と共に野州那須温泉へ遊ばれ、 松竹を 家と共に野州那須温泉へ遊ばれ、 松竹を なおいますが、 は十月五日、東京及び静岡の州柳 市榮町

東深かつた丈けに惜しまれる。 西島○丸氏(本誌明治以後川柳年 に第三號を發行された。▲富士野 に第三號を發行された。▲富士野 に第三號を發行された。▲富士野 を馬君は十月十日北海道へ近くし げを、壽山君等と三越で柳展を催 すと。▲福田山雨樓君(本社支社 すと。▲福田山雨樓君(本社支社 すと。本福田山雨樓君(本社支社

ばれ、 松竹を開店。

日 (秋田)▲秋田川柳社では全國川柳田 (東京、大阪の卷)を作成回 家雅印帖(東京、大阪の卷)を作成

別 報知新聞社通信支局。 別 報知新聞社通信支局。

【福島】▲高橋非常兒君は會津若松 君(鑛川支部幹事)は鳥根縣鑛川郡大會に出席される筈。 等が活躍されてゐる。▲尼綠之助大會に出席される筈。 等が活躍されてゐる。▲尼綠之助大會に出席される筈。

(本社同人)は十月二日妻子同行に

【東京】 人大谷五花村氏(本社客員)

に遊ばる「嚴島たど清秋の中に澄 高松村へ轉居、 十月二十 日宮鳥 病臥苦 る

【愛媛】▲前田五健氏(本社

客員

は

部とみすか川柳社 + 本社今治支部の原田輝親君が十月 忌は九月二十三日に催され 行された。 社用で岡山、 H に發刊された○▲本社今治支 ▲「夜明け 津山、 合同 福山方面 前」創刊號は È 催 たっ の川柳 へ旅

れたの 出發、 【高知】◆中川星永君 月二十日に催された。 村)は本社十月句會に出 日帰郷された。 (光耀會幹事)は 澤方に新設、第一回 高知市北新町二丁目へ歸ら ▲新興川 柳社 十月 ▲竹内機見女さん には高知 五日夜大阪を (高知縣川柳 同 人會 席、 市山 + は十 H

次郎方へ寄寓された。 は今废徳島市艦匠町一丁目十河三 ▲姬田夕鐘君(本社 同 人

【朝鮮】 血蛭子省二氏(本社容員)は 【北海道】△龜井晟修氏(本社客員 は函館市青柳町 五〇へ轉居さる。 を配して再び往時の道頓堀句會

川研究の續稿に執筆されてゐられ 切に快方を新上る。 の中にも抱らず本誌の武玉 かろう。 黄金時代の現出さる」も遠くは 頓堀幹事の肩代りの言とする。 貧弱なるこの女として道

肩代りの言

minmm

よし氏 堀支部が幹事の御世話願ひし庄萬 つてゐましたが、此度住吉支部幹 嘗つては華やかさを誇りし道頓 の御多忙の爲休會の形にな

に人格圓滿、 川柳熱溢るく禿山氏あり句會幹事 御成功を祈る次第である。幹事に 0 大阪の中央と云ふべき道頓堀、地 H 世間音、 事奥野禿山氏好意的の盡力に依 發展を豫期されたものとして、 利を占めたこの句質が最早未來 回を催される事になりました。 初句戎橋電停紅瞰光にて更生第 史呂の諸君の應接にて來 交際圓滑 たる史呂

#### 社 告

が就任された 本社支部幹事として左記の 松 江 支部 奈良井柳人 諸 君

◎本社客員として小川武氏が快諾 京 光 道頓堀支部 都 超 支 部 會 明石 奥野 增位勇多子 禿山 柳次

第

五回(十

月

?

された。 本社同人として左の二君が入社 されたっ

廣 原 都 會 人

新

見

世

間

晋

路郎盃保持者

ts

本社句 の路郎 盃獲得記録は左の 會 0 飨 題、 路郎師選天位 通

與

賞

第 第 m m 觀 TE. H 光 君 1

第三回 第四回 7 H IE. 題 光 庭 #

たそがれの庭 坊ちゃんにいひ寄られ 毛利九波君

TE: 課

せし 申越された。 がらせ」と句主正 「だしぬけに死んで は「だしぬけに 光君より 死 町内寒がら 10 HJ. 内を寒 訂 Œ を

れ創を句るあちのい



理整·樂胂·柳汀·郎路

文字正

確明

に記 <

こと 紙

用

紙

は

な

る 稿

原

のこと

淸

規

開催月 締

日 每月

及 末日

場 瞭

所

記

人 載

0 0 用

切

は

投稿:

先は本社

事

狭、

妖氣 君 この行、水気が立昇が 來會されるあ 獲得するところと 季を通 H 何して 八 H 遠く高 じて、 りさうつ 句 IJ, 箋と戦ふ4B 知 作 恒の 旬 例川 の路郊賞は毛 柳 0 絕 の先からは熱の より 好 Ш シリ 中 JII ズン! 利星 九水

九孤角先、 かりる。 雨少、緑はる、 郎、 煙咖啡 紀雨鮎正柳太、美光、 なった。 上光、世光、 神美、 鐵波都 命 市 音、美 心,静 (存光 人、 青兒、 柳狂、 人、柳八、 秦狂、 器月、品八星 波 # 終電型シーリ 席 題

出

葉蝶子步水路魚の、、、郎

助九孤角

3

JL

牧霞、

利、 桂 TE. = 電 東双さ 東魚 車けぬ鼠にを 郎 デみ知 食智のの引 青玭、 き品 、不 5 勇,然 死出たれけ落 滿白 ほ 光 潮柳隆 艸美牧披 3 子、 講 化 你

滿九青雨 潮天兒少 旅先で 1 米 題 ソの 0) キ旅若 3 水曾路 をが 4 かす にみ返 旅狂續變 3 よせなま紅さ 3 1 U 美八正鮎白亂 代路步光美子耽兒

車に立

一ならず

や女

ò

る揺り

るれ女

文點過ぎを市内電 事 クレヨンの電車 流 ゲ 分別が電車に乗つて行 二の腕をみせて電車の であるからかふ女 と 角霞少波樂路 石 史清 乗過ぎ事 日の 說妓 いた 終ツ 出 え電トい畵れ 3 る車級ふける 牧み鮨桂史星九與

18 0 人る美三呂水波郎

財味座世座煩胃秋座鐵座野 関唱軍を輝惱アト も禪鉢禪狐 ののしすしがトはをへし禪一香てねて座ニやすひても た寺禪」座」ら 太少 人朝み座のの久禪め く柱 座のて禪空瞼しの親 も番のの部振が先がつ 伽藍へででで 本は 5 石と旅れ室り好の冷 のと付のがに禪見を て晴なのへいを の出かものき湯め旅れ本ひ休旅教事 きた冷 すけ 續が生 嫌のつ閉 た洗たら大道と槽た行とをとみをへと く今尚けてま ては二めき 面二ひ阪の云に過好あ買りな知らな いくれ皮たか な終不た行と ま器人ぬ辯幅ふゐぎき りり解りきひろるる限り りひ旅く 九雨正星い春か亂都蝶素艸九柳美都素 九素德鐵素不亂岱正鮎雨世 ほ會の 代會 間 天少光水む光る耽人助月樂葉狂路人月 葉月三心月角耽石光美少音

友情は條件のことものことものこともである日友は禁煙に花束さ友情によがりりた情にないの不幸を表情によがりりた。 滿秋洗方洗太一許現や洗 まが 題 り病畫員面ス家ンのし冴 を選さになった。 のがラ物 う自がだ洗へ女 と友酒た 人 さ幸の い手わけ湿地 夫七酒 房 中に情を あずをな でかは物もの の見をい で觸のす チ 4 るオ 死職舞 ン洗る洗を ぎ金 の物はい にはこを 洗、 きぬをめ 6 を安ら ドふ干ふ も物な 濯機 崩な握にゆ就れぼ貸 か干來さ れりる來き きるし し節れヤの場りめ屋嫌 柳九琴み青同素美滿 代 ほ [11] 笑波泉る 月路潮 鼠葉美少る水太波少石音

席題 洗 濯 総 耿 選 席題 洗 濯 徹 耿 選 席題 洗 濯 徹 耿 選 席題 洗 濯 の 所 記 大坊主小坊主小坊主 ずらり座 禪 堂 春 秋 大坊主小坊主 ずらり座 禪 堂 春 秋 (地)秋の陽へ座禪の骨のぼきとなる 鮎 美(天)拮迦扶座やつばり匂ふもの匂ひ 正 光(天) 法一次の場へ座禪の骨にたるとし 艸 樂 (軸) 邪念去らず座禪の臍したるとし 艸 樂

昔生塵塵ブふ杯塵ス塵新銀金號せ塵塵黄塵塵偕楽氣落大 か活いにラと持先ピの妻行偕外ん先い長のつ家内安葉且 沈倖逆馬 默せ境野 題 よ男の郎 庭朝 N レ泣人 寺 友きへ ひのせ 佛印級妖置れいさか名る す友友 でのぬ眼人見ものれ燈え りな ての捺の氣場てのはら土を のる情は 松淋服を子つ秋知たをるし庭庭を し顔を所る窟庭起にこ 酒相强横 がれを干にけがら寺と庭庭をいす てで放と洗いへさ庭う を手くを あ勝ぬさ甘だあぬのものに持ぢまやなつな面の來れ廣構 酌あ觸向 りちぎらししる金庭し石秋ちりせりし蟇り器とるる みりれき 八牧都鐵 九蝶同艸青み九滿素與い滿素正九滿鐵正桂與青世琴葉春 0 三き 間 會 0 樂見る波潮月郎も潮月光葉潮心光三郎兒音泉光秋 步人人心

庭版版 詫び

111

1) 3

2

な嫁め

5

をを話すった

供

菊庭

をへ

矯立

美子郎

(人)大學を出て抵當の体管をあたへず庭のへ

の立

の庭た

か知れ

路九亂鮎綠同鮎品與

大臣 確答を

#### しくとも 111 柳 おし 會 つこをす

(天)

地

他人手に

庭坊で

庭

郎波耽美雨

やんに云ひ

寄ら

12 3 3

例 會

助の直

て題

のの腕

=

1

文身を隠っ )交身が今日の身 **物槽から背中の語をたづか** あるをおちがまんへ 一勢をかり " 背 めがあっち は 中の龍も まん とだけ 交術 身な 办: よあ 龍ねて き でうな 呼は ts 1 0) 分 0) 0) 市議で ん知 0 阿金 2 笑 よば萎 1. 3 昇 つらは れび 6 男 は 7 にな てれれ返 てれだか陀出あ な 鳥 利 正た同洗葉問川同淺同同け 生 n 選報 を 市秀 康 - 生

> (大)運 人

6

思ルて

ひのは

舊友が 一ト 昔立の

五 副

かな

るれ

0)

も元無呼

上上那と

りに

强 麦見

セ果錢

死の床へ数

人

は

文身に威

書を つ招 飲む Ĺ 衣をルバ 5 九 は Ŀ 素出ム x 3 氣 出して着 IJ 友目氣 カ 見 のやのな 5 と王 借り つ嘘いて笑 \$ 世 景道ひ朗 1: 6 てを出 \* ねか く毒」來混世ら合 し來京 れよ るぜ振ひ U 振る 3 洗路柳葉同柳淺淺利同千同同若同正同路同同た筑 け 川 を 秋 TIT 生

友人に博士があっ すく戻る椅子を帽子 可言趣味にきこえる の、あんさんと伯母の れて出る子は今日も沙 の話。 暇父水番用 位 がはををが 1. 7 が出言打さ 出言打さな 千路芳利芳柳 たけ

7

選

友 1 4 に遇 け及なと ひれびり 秋生一生一秀 を 塵生秀

虫老失し考屈虫宣人蜘虫幕電燈 のの幾めへ托の告間のらいに 撃身がでも撃の プ くのがのけるな虫がのなる三鳴馳ば降虫 ラ 出おさへて醉はぬ といはれたが今日 変その意氣かまき を嗤ふかな談へ中かな談へ中 うたいた所を 題 史 いやうに云はれていない ない つとも とは がして走 虫 む 間切燈には て 虫來に 所 ば落ば 呑に 1) れ火虫淋女 0 れ 持つ H しふ 虫よ L かち蚊む家 ま 9 を る親聲街景女 虫 0 1 1 T 7 を 出 E 0) ては虫がま 8 0 虫籠 0) 世な ゐこ轡來迫の建 し油夫 ت 生ゆ別こ 似ののめま出な笑 飲 之 3 活きれみ て整虫ずぜ え虫る り宿ち 7 虫 1 同同橙同同利同路同洗同柳同 千同湧筑

秀女女生

たけ 正同同同方同同氷同同 を 三川 市 生 生 秋 IE.

- 58 -

一今日ぎりの と言 is.

栞 選

(七)虫が恐いと仰山な嬌態で あん(七)虫が恐いと仰山な嬌態で あん(七)宮田屋の前に虫賣り荷を 下んしおりないとした。 同 同 (人)話 -4 同 同 地 地 人)買ぶて來る迄は鳴いてたきりぎりずりな人)白鱶へ國寶と言ふ 騒 ぎ や うた)のないのびもごみ 赤ト )語しめ)自蟻へ 一今宵限りの大阪さ )虫がす 曳を聽きに來いと新築見せたがり晩酌は虫が鳴からが鳴くまいが )かまきりご言はれながらも生きてゐる)なんといふ虫かと仲がなをゅかけ なんか 想むひ めは昔も 型の か 見女を送る 虫 ぬ男の 聞いてゐる譯 如くに 性てい圓虫ン 同じ 0 わぶるて入にの C 顔をよく 虫 史 虫 び 2 れ逃虫 し見い交てげを 實 \$ 6 養けつふ叉吳歸食 鳴 融 寺 け き生れめ妓點れりひ 洗路た柳氷利 度生を秀炭生 同 同同同同同同路柳利方橙正米同洗路 柳氷利同同同同菜同同同 郎秀生正舍甫炭

> 今川 / 神雜誌 部社 週 年 記 念 111 柳 大

會

月 H 治 軍人 會 我館 樓

1:

九

靈子の諸" 員廿餘名の より 0 不氏川 は 危 前 險前 必を突 柳 H Ŧi. 雜誌九月號を抱 西 健、 破 猛 條 し當日朝 風 酒井大樓、 0 荒井英賀夫氏、 九晴朗、芝田周さる、松山 部背 表した西田 べたりし 御 出 明 報 \*

....0 れを惜っ 逃げ 先立ち 祝電御芳名 石 閉會す、 と野球」を語 3 崎 失 す 氏 の開せ 西 が L る、 H 「柳 會一 0 to 閉 帅 颱 を語られ、席題柳扇について」並 時、 ]1] 一會後南洋に於て懇親會を樂氏本社の現狀を紹介、 風 柳作 もと 記 念募集 品展 0 熱と意気に 覧合より 前田 前田五健氏 不能題 て懇親會を 0 披 記 額 念句け 講 負 感激神に 開 K き 續 俞 L 别 47

熟狂に足をふま熟のある子を生熟のある子を生れていません。 戦争を対 世間音氏、 のある子を先生が る局 葵德三氏。 增位編輯長 力飲 て生活 まれたと へさせ 2 熱 2 連た 別別もれ三で靴 にれ言て十はを 九知は 持たへ來 4: 路 郎 小亂 百三 氏 蛙 童府坊樓樓

長、

宮內耕朗

氏、

新

儿

軸)渡し船露をしごいて棹を天)朝露へ此んなに鎌のよく

(地)白露の長く光つて黒(地)白露の長く光つて黒

ん父がとのあ

1)

果て

す

智 柳

切れる 入

九

五觚蛙

天)今夜しのいだらごいふ水枕をかつる地)うてばひびくがやはりびんぼう 人)熱心な弟子へきな邪魔が來る 住)熱の子へ水着の夢が續く な り 水着の熱 世間 藤曉 英 賀 生童香朗夫

友達 貨家札事 風のあとにか 遠の 歸っ つい 記念募集 村芝居スケ すたれ " か後ば チ なで虫 虫虫も 增位汀 のの啼 整整 柳氏選 心百九府坊紫

(同)衣づれへっかっるりんがはたと止み(同)默想の 前に 横切る 油虫(性)もろく虫奈落の土の香にひたり 露振つて 手にのせて浮塵子いこしむ 心意募集 身 體 を 士の香 た露清 父がめ 夜の 前 田 机 れ Ti. 健 氏 小步 汀宵心馬 選 占 柳明府山 健樓明水樓人

恩人に記びれてる。 恩人に記びればる。 恩人に記びればない。 思人の新重すっ。 の子 の丁寧すぎ 記念募集 へ意見するし 恩 ぎ事 ぎぬ間ては云 叱面ふ た事 らはて 成 れゆく 大 表る しれ 英賀 步小靈秃 人樓子山泉夫水

- 59

人同同佳現現

現現現現現現での

が 現金でどうだと無理 現金があればと思 現金を丁寧に後いてへ入 で買ふと團 扇 を で買っと関 扇 を の魅力ニッコ と

11

つが続け

るきみ口

穷大 艸 文碧 世 晴 艸 曉 大

明樓樂庫川音朗樂童樓

m

儲值

けれK

天同地

占酒屋できなずかいてことづか。 いてことづからず

ちごり

H

汗どんぶ

1

から

() 恩恩 開現現現明 小應一云び 村 人 他 人 應接 (対)凡凡人 地 店をに **金金金日** 1) 業績は滿點恩師 (2) 恩人へ此の頃すれ (3) 恩師とは別に學家 (4) 恩師とは別に學家 (5) 恩師とは別に學家 (6) 恩師とは別に學家 (7) 恩人の死幸へ不思 .6 ヘみしたん 人人での人人に なせられてくなす 明暮ばな人 雁 金れら手管も まノ 應ど母を 團團選援 利將ちあへ のに手関の援母校呼 へ甲說ま持ば 斐な 立ぬつり 多遊とる錠 整雲のの旗ののの ね \$ 賣ばさのを か盆ま眠をを 無い」酒て堅 がが父肩を洗神應至 踊となが 主すびなか 見取 沙生るのゆい か飛默の振緑參接來 義氣れり れぶり巾り味り 汰活る味き事 4 夫 步柳世馬芳 英小秃世德靈質問 世大藤步德 大碧九九九九 晴小文秃 間 間占 間 人石音山泉 夫樓山晉三子 朗樓庫山晉樓生人三 樓川天紫天紫

結結結 結 佳 東東東 東 席 のつは 中 題 張り 今治 皆 0) 3 00 % で大 はで ネ窓優 人 ジガ:勝 束 ま である である 優優がを傷さ + しけ血 不 血血さ 2 平 握まは 降 りし若 あ 沸揚な è 1 旗旗り 1) 飯たし 曉 b 5 童 同五。胂 氏 靈 紫 宵 五 大 宵 艸 心 大 柳 小 曉 選 朗 继樂 子陽明健樓明樂府樓石樓童

> 軸天地人 同佳 東東をはずれません。 他 である。 ないない。 ないれば、 ないれば とっなれば ないれば ないれば ないれば ないれば ないれば ないれば ないれば ないれば 一供すたし月月 平の滿が等照る ぜ成の さは長意 び卒り背土戶つ つ中る天窓氣 出を手をか 白來居前指知意 さ向の残り れなれぎ墓れけ松 しるる 1) しる氣 艸宵鶴晴宵紫五柳 曉宵交沒五紫大 心靈 食 童明庫子健陽樓 樂明聲朗明陽健石府子

しであすやのてなの とい鶏れ仕し末るい昨 をがや度まと巡失日 さかな すせ知業業今小 た鳴こ てきれる り部者日 5 曉心晴紫心藤文柳大五心 童府朗陽府生庫石樓健府

まうさび

過

LI

とろえら

軸天地

のへ

五年第二年

逆元

ひけ

出土浮通

瀬

樂木客

し號きれみ

波

浪

る日

虹

1

ち

人

名月

10

か

部

題

放

浪

樂

公

遡

席

題

别

九

瀬

石車天樂

人

の総

說說說の祠出賣聞

E

んま のの嫌

1.

額がけどか連かを博が二かかび

を 池起

芽注次

が連が位

かがび置を變

1)

卿小水某久九喜美秋丹天

\*

傳白土傳傳傳傳

る神像にて

春木説キの科

プ

濃

人雄天山路生車秋

その

ま

7

情學相

\$

面に

白浮

恐的

ル 月 大川 十 鐵柳 局雜 日支誌 娘 第 他 14 國 畔 1 E 柳 = 社 暮 [1] 句 + な 父 0 阪 小

樓

天地人 地)方荷物物 關荷成に のでがが題 1 だよ物にて でである。 一重 傳 を手荷に かあらう。 新預歸もをと日名 しま産 ひ差れの げ肩多げ 於 L て潮 力。 大 6 7 す出ほ出田を 鐵 を 招か 俱 來なぎさ すさ含發軸 樂 てれ酒れ驛つ 部 大 18 艸木久九水某喜美陽 [11] \* 濃 雄天客人山路幸

網夏夏夏 棚羽额線 た織ぬい ん女でち で白碁後 あ粉盤が げ氣 つだ指義 場所 に能ス .6 考 をを 史 あけ は あへ 羽てか降 计 樂 公 丹天水某 車秋客人

履天石太樂車路人

(軸)あつさりと明れ際活の手摺別れ際活まつて別れ際だまつて別れ際だまつて別れ際だまつて別れ際だまつて別れ際ですが子もかと強く酒の香かと強く酒の香かと強く酒の香かとなった。 が持つ 別れ 母 女際 るの添は は 皺ふげ闇 る母い 13 氣別でて をて T れあ來な見ゆさ 某紫小水帅秀 JL 陽久 米選 香木客樂太天幸雄 公履人客秋車樂 團一ガスカ敗

返手不糠 軸 軸 動結門 料機味席 フ省 ス " 女 7 殻の 一戾 手のさの題 1 4 1ら題 棚 7 1. 料酢裹加 クをを関 して古 スコ 筆る町遠根結團 4 上性錢 蟻 手 理蛸の減 は切料は 根 黑應內卷城力 格銅 (2 9 理 料 本 れずがが理りますがず に関 IJ 2 を結 昔 を貨本 か " と旗云て 結 知置値あの位 公秋ふ巡誓ら 酒績ら るい切る戀置 丰 いすが を決査つや かい る女をを て よてぎ焼披 曾染謙あて ま き本あな學見替 しゐるけ 膝頃論り り生る る堂め交る るれ 柴丹九帅互 水木某苦丹天 九柴秀帅 丹美菜 樂 風 濃

客履人公車秋子

食放放放 ひ 浪浪浪 つ見慣い 席 郷れっ 7 できたとも 夏 羽 総 見はを京 へか、甘辯 歸 さくに 朝せ見馴 談ずるれ 任 3 喜丹秋帅

山車生樂

座人名名を週月月

4 4 記

月に居の

の顔る名

の上はあ

で底げいり

天某木丹苦

子人履車公

人の

母

办

憶

樂

ラ脱れへへ

が、そこになってを食い

名月

知街をけ

ら月々

見

0)

風

題

本

木

履

か 出 風 子 久 選 米 雄

JL 11 七尼 山崎

台

會

Fr.

庫

居新滿新新新所聞員開開 天 地人 型取り致へ于新聞紙上で農 関で観をひろった汽車間で観をひろった汽車間で見た時火事の大 資へ新聞敷いて産って 資へ新聞敷いて座所間で終をひろった汽車 関で終をであった汽車間で表がです。 で、大事の第 らしゅう子らし 動 いのう新聞 體事出 < 讀 を遠べ てなにの二路 郎 先 先 遠磯遠た路磯山磯見け 生 生 路野路し風野田野

> 九 月雜川 + 社柳 光 Ti. H 夜 例 永 H 里 + 儿 大

天地

)肩車子の

風に長髪なっ供は髪を

を

1)

せし居

るめる

遠

見

ぶ握

於 カ す 五ナ × 喫 米 選店

なして ら寝て と舞妓 ない 政付 つ手 母 舞妓寢 计 1 見た 妓なり 知 を 0 額 1 1) 同同同同里回同德同豆同蝶 十 九 三 秋 助 雅同汀同艸同

按膏膏摩藥藥

を

ス

ター

シーに拾われ汽車 へががない別れに見つが一杯飲んで自動車 へがはかない別れに見つ

7

分

文同磯

野

1 1

786 5

> 遠見路 たけ

L 月

(人)横

・ 対 を 見 没 対 を 見 没

留舎バス

遠 交 西 同

月

る計簿の関わば関係
はできる。 見ればの灯は

代が良く目

先生

月

摩變り ッ帽子を 題 買 變 子が少し 大きのを舞妓見て 行 と色 < 唄 すよまら な言 0 之 助 卿か ほ 3

(同)柔道書へ(同)柔道書へ(同)柔道書へ(同)柔道書へ(同)柔道書

洗温度の

後娘新新髮洗髮雛の妻社が長いました。

ふの供

にば居

居る

0)

b す

加同同

に子頭

何丸速

れ髷髪

が友し

けひめ

遠山たけ

路田し

浮や誘初

となく

世話

かい

目

1:

同たけ

今女

自富 4

彼の

氏髮 0)

5 %

木路 (同) 群變り(の) 群變り(同) 群變り(同) 群變り 席 題 育母とし 梅 母にすげな 月つて 早時とはなれば い事も 云ふ聲で 續 < 麗 3 利變なな變 か 9 9 1) 3 1) ほ 豆角艸か里徳

梅梅梅特 古風 漬妙少 題 な所に直風な妻 母てつと の落たな 我ち食り をてにに 通あつけ りき 蝶里艸德 之十 ほ十 助九樂三 秋嵐樂る九三

表が一 ひ 7 う段 乗りれ かに 勘痴に 理窟し、柔道家 みん ま毎稚 道 日 ぬ掻 負は風結と玉奥風 膏藥 肩かめ叱 たの 角 ぬてをん柔をへ 峠膏 8 くられせれ な茶薬 な來入で道撞呼入 ₹屋代 るれ居家きびれ 蝉蝶里汀蝶徳か角 と十 之 ・ほ 繰助九柳助三る嵐 同蝶豆禿里豆か角 助秋山九秋る

席

題

7

3

3

0

灯垣氣

るはの瓜

力:

りな

糸八八に

つ結越ま干紋

つ五臺垣垣て手て年

艸 靈 耕 大 晴 九 同 五 靈

か燭がををしに御

まと主附潚垣

添と何

し派し百

きの子取大きい 虚女達の思ひり 附添は 約約 軸 九 附は 席 雏 約のは兼月雜川 版の立つに振り立つに 題 束驛露題 へがの 十社柳 電 あべ約八 伯 車んン い歸 H 磨るに 話され チ 非 ま 1 が東 はき 3 \$ りあ 鸭 美 1 姉のの 3 美 明る 笑 るば B 手ね人 報 3 そ行 取 術むな すか美

1)

い柳

七里

3

美起い

3

木犀

包

71

は

見

あ

げ

6

えし

7

B 呼狩狩 美起秀 笑人峰

男世帶の茶粕 に 大 日 の 長 日 の 長 日 の 長 日 の 日 日 日 の 日 日 日 の 日 日 日 の 日 日 日 の 日 日 日 の 日 日 日 の 日 の 日 ん松 だ DV. 1 九つ 1 松 IC に垣杉垣は朗十山 食 П 堂 會 は 雨 型 をやぶの愛媛 0 夜を靜 つて 办。咖啡 に樂 句氏 作御 ま 來

樂子路樓朗紫 健子 厄 恐 名 うがひ むし題げれ穿られ題散のにの十川柳 石落厄二厄額侮 で屋梅梅の 百 H 侮へ 日屋 ち 3 をまをのへ H 聞いてらみがく 案ば靄の U に空 0 る垂殺動生松 明模 るれし れり け様 綠 好 吐 朴 如川大綠笑 意緒則助則 選 郎緒泉

茶調都薬草の F カダを草 0 うな句 11: 趣 り薬ら味 題 の半 にの 味錠 遊 干で 錢信 あ劑 め一草 草 僧前るざが娘 舌じ峠ま排とへた頼秋 打ら茶れら違ららみ迫 しれ屋るずひれず狀り 同靈九艸大耕靈同大晴 子紫樂樓路子 觀朗

接那接食ふ祭

女義刹に

甘瞳い

にくの唇

ふうや賣

るけりつ

ゐゐこ居

松大田如

濤朗緒坊

鹤意

るるろ

が接那の

カ

題

חלנו

好

紅

第雜 支誌 部社 高 松 吟 社 台 鳥 根

H

は

ほ

0

2

かい

12

好

DB

題

時びをお九 て友芋月簸川 ち女女侮す悼作生日 談に日 深 ·i. け長 1 省 る月 報 0 祭 す線明 之 H 助き浴後 とこ るんが漂流 柳 ふ朗 1) 翁 虫居 を 0)

> 似童 葡萄 など書いてなど書いて なが単和 34111 ナ柳 雜 か誌 吟社 支 甘み 社部 合 1.00 夜き 柳 をく 思漫 ひ書 句 笑朴

治

初寄のら碑の治髷ら題 附師を傾煙れる像難 ル像難初 の初匠以てを初にい 電影である。 電影である。 電影では、 でいる。 でい。 でいる。 でい。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 。 でい。 でい。 鋼像 頭寫がのに落す 偲吉 さ彫苦松目 へば右 3 交れら心のな如 れ衛 紫竹 る門 学るれ談色り 紫一心枯心狩藤 心曉 陽風府佛府明生 府童

悪筆へ 判 大 厄 席 H 0 來 唯 ま H 運 7 秘思も 命 書筆憂 2 はのき 論 恐走生 5 縮り活 8 田 し書よ 3 大笑梢 松 朗朗風 藩

— 63 —

朗 泉

手花石化野貧 折りたて 一けの 花 臣 1) 來 ム配出を 題 題 民 \$ 0) 花は て説ける 1 あがて佛 九段記れ 社 N らをて 压 り祀に んな 草赤る光 女氣がの忠り れ郎な伸ぼ魂あ る花りびり碑り 楓 许一藤紫紫鏡鹤 明風生陽陽浦聲

> 支川 柳 雜 部社 + = 創立 台

供野生

物地前

も臓の

待面し

きにへ

れ風供

幻あ物

子り淋

が供し

座へす

り物ぎ

紫符一

の暮

大 阪

部支九 つが切の部 月 た緊つ具な八日の日本の日 しカに、 たそ 旬於 おの準會 \$ 00 望 のだ 連 0 H 0 日喫 0 香だの店 六果 川名店 柳の階 愛支上

て汀會 が 張 會柳場來あだり たっ 識 K もた、 7 に心場 和 た 砂 を雨ハ め迷チ來 1 にす迄ぐ 三切た處 十るひる氏れ總 女 時有た虫のる勢地 記 りの力計四十五 念す 快了 い加名打 \$ 診胸 ベ辯 つ静應ふに か接る餘の裡た 15 盛耳西に 育を HI 加本吾果 \* 艸作あ社 の傾 40 りより よの如抹 It 旬 氏の 貧何の を 選の三か卿 L ? 不 ぢ何初味 1 樂い

名枕

工は

題

林

靴のず

下今し

ど日でたちゃ

んれの

書とす

の遊こ

枕んや

晚步

童人風

でか

軸

1:1:

2

娘

石

1

0

かかか

かれれれれ

んぼり んぼり りが んぼりが

七つのが

ののつだ

素時け見

晴らの出え

一宵晚柳

風明童石

ま

戀供見

< <

席白部終 者蛇をり 洞特に終 に終 静記始 --しな意 が道を 名 一姿をも =, 謝 0 鐵 L 心 た奔 V 走 せ 泉 6 th 教 1= 人

報

(軸)嫁くは、本を娘では娘の戀が日と娘で

母る羹へを

の娘を母打

押胸る草た

きは 母

が豊疲鳩と

内る計る

千晚紫竹藤

れ鳴のれ時な

羊行時に

明童石 石鯛竜陽明生 産産産産産産 よは産 の主男 0 產 實 空思 世 二部 かわ 明ず匹百も 日里聞 け腰 そが め浮本のて き晴子來 静い杉鐡い 3 路を田心を

供供お

1

喰は

べ慥

たかや

事二か

に本ま

すなし

宵 曉 柳

物供

× 物

指圖

隱居

題 +0

娘て

一出

3

柳

H.

陽明風 は産際を開 変際を開 り (地)産際に一 (地)産際に一 (地)産際に使 Ti. 選 日でいの 勝戦換を 本 人ぬ .0 産て國 と宣け電影 9 は驚隣へ 3 かげて話になをも産 か慌し旦チ醛 る姉 て移那 一な行だ民聴慌あ り磨りく し船くて

艸 獏 曉 帆 愛 同 牧 白 迁

兒船三

蛇

人洞

キ四泣弟女留キキキャ後くの工守ヤヤヤ 方手の番 ラ 7 = 7 憂 メキがは x x x ル 12 1 + + 12 6 7 を 1 t + きむり ラ 5 5 明 買 1 丰 × × 12 + H 3. -- 12 12 7 12 殘 X ほ 0 持 0 かりと寝 がりと寝 0 7 3 0) かかせ まれ 前望取す 行 七 てき 1) 牧鐵 二い静隆玉艸獏 3 人心坊を路一芳樂

(人) 甘青甘甘甘 甘甘へのに 嚴言言力夢乘知知 題 な顔を 甘言とも 0 ぬてつ 11 若さ はなどはいとが くばに環覗 In をの念けよたら が服をこ いむ 甘吠の入ん光世な え柄れで り界 雨静と壽鐵帆い獏 を 选 選 迷路を雄心船を

-- 64 --

共上に虫 まっ人工の虫をデ

でパ貨

賣 た

1)

3 最の

水同同

命

0

あ

まり

悲

3

若 香

さ を 君 秋

な 灶 0 0 な 25 拖 4 逝 坐 0 憶 オレ

1)

邦

曲 3

n

車

7

つ秋虫

し早際

どひ

[11]

車報

秋

風

3 3

を伏 0

せて君

0

若さ

な

憶

便

6

思ひ

80

雨 b 3

あ 史 不

\*

美 呂 光 夢 平

水

0 煙

池 0) 灶

うち ほ <

0

伴

は 君 煙

E 0

0)

かに

を 萩 は <

梨 薬

香

0

1

4

世

3

14

今は思

U

出 别

鬱 れ 出

2 戾

弘

羽に迄上 同同 同 同 同 佳 す EE んぼれ んぼス 2 から見 1 屈 0 とんぼは先 3 まだ生 上 高く旅客でんせ 1 釣 -輔 到り可愛いこ ル 宿 きで 行方知り 知 を 流 いさくなつて過ぎ 供を冷めたくし 忘 Ţ. 12 れん居 0 數 愛雨 靜 白す牧 藏迷路山船洞 34 を

西西西西西西西西西西 [III] मा मा मि मि मि मि मि मि へのがに 0) 1 席 0) 教 15 道 みあ素並鏡 ス 17 んて人び美 府 K 7 先 會開天 ラ 0 意外 骨細僕人 先生 1 で地井 谎 工等も 生 らがが美のののあ 4 まし 數奇 低 味値壁兵ら 故 か 力 いがががば る なななな高途出こ 雨 0 1) 1 1) しれ來そ す 迷 V 艸 帆 靜 伸 艸 牧 鐵 V 3 3 = 選 人兒樂人樂 な 坊樂船路柳樂人心

彼辯彼

いに

6

3

3

藏 雄 樂

0)

仲

1

父

力:

緩

衕 す 3 ま 雨

獏 龍 愛

しくな

1

親女

解女 がよけ

0) 彼 席

雕

3

見付け

れ

ほ

壽美

٤

\$

彼

15

迷

1. 女は彼 伎 座 0 觀 劇 と風 句 會 は 吹て

軸 天 地 人) まぶたの 女と

女

\$

3

迷 船樂

彼彼 1

女から視り

E

7

7

ら視る人生は濁った彼女で後女に人間られ

H

hill

は濁つ

水谷鮎美 大阪

報

1L

H

H

夏 九

天地人

先先 4

慰愛へ先生の智慧 尤生が持てば素直な 大生の教へ心に觸 きの

物れな筆

3 見 入が

え

6

先雙

はさり

気な

ま

眼 足 T E に問

か

雨 牧曉 Hult 牧帅

迷

主從の 勒進帳 延 勸 の涙 I 0) ももり 强 舞 ると馬士の 夏里る西狂 辨れ 3 0) の子の子 陽 し玉辫 慶 帳 1: に去が慶 ナニ 1 -1-ろ笠 松る動隙 踊か わやは すか む巡な 狂ひ がなな な れ禮 な 風たいし X 同同鮎同同觀 鮎同同觀 美 11 美 H

子が

死 1

んで秋

詰

6 3

な

1) 影

與

郎

まりにも思ひ

出

多

君

Ti

月 未 秋

讶

7

遠

くに

沙

L

芳 錢 洋

香

完

成

柳

道 逸

あ

1

君 ば

の夜を君

0

話

偲

7

4

Ш 清 追 悼 句

若竹 忘られ 句 寂 人減 を 光 刊 な 0) 偲ぶ友みな 殘 き友 る君 0 术 書 2 L 丰 7 君 没 南 とは 秋 0 1 名を な と折ら る 無 0) 深さ なり 由 來 L 11-呼 b から 7 秋 30 れ な Hi. りまに L 淋 秋 L 君 0 む 0 君 を 佛 さなな 逝 3 悼 よ ナニ 3 頁 よ る 文 ま < ts 文 鱼占 夢 V. 紀 T TE. 路 裡 太 郎 蝶 美 秋 光

#### 編 輯 0 窓 汀 柳

かな地 名吟が生れ 感じがするが、 が どことはなし、 思はれるの + こもつてゐてすべてが冷 鋭くみえて、静思のうちに 一月 れら川柳家の詩心はいよ の底に吸ひ込まれそうな のこゑが聞えてくると 出るのではないかと こうした時 そこらに哀調

は 全に強れて了つたので豫定より 僕 八三郎、 出てゐる真最中の三日間は完 の協力によりどうにかして月 も一寸無理をしたために校正 務の疲勞甚だしく病褥にあり ふ編輯局の企ても路郎主幹 + 一月號は斷然早く出さうと 史呂、 九天、某人の諸 雨迷、

は

に出來たのは 何より 0 あ

內

た、 置 礼 が御多忙の為め選稿の發表が遅 6 \$6 愈 Н 4 てゐるが御了承をお願ひして ある。東京の卷は前田雀郎氏 願ひ出來た事 々本號より掲載する事となつ 選者前田五健氏に畵の方も 本名所名物川柳 は重ねての 四國 のをは 嬉び

繁忙の為め本號締切迄に間に合 ▼川柳指導講座動物を愛する心 たので ぬので次號にとの御申出があ 選評は講師川 何卒御裕餘をお願する 上三太郎氏より

0

別會を催した翌五日高知 竹内機見女さんは紅瞰光で送 一出

發

3

れた、

校正

の出

る

頃となると

編輯に べ感じさせられる。

家 が社始まつて以來の快舉だと一 る家庭の團欒の延長となり、 總出 本社の松茸狩は川柳につなが 0 主幹の顔がほころびる わ

不況で

記事は割愛する事となっ

の史呂君まで遅参する未曾有の

を煩した。 適當な目が無かつたので艸樂氏 ▼今月の月評は、 みんなが集る

家の來會を特に歡迎されてゐる ▼小川武氏漫畵講習會は不社 上で催される事となった、 川柳 階

▼放送 たの 京の三氏の分を舉げさせて費 澤山頂いたが、 「川柳の夕」の感想は、 松山、 大阪、 東

出 あり、ア・ラ・カルテも出色の ▼有爲郎君の川 來ばえが揃つて川 柳寸劇 柳家は誰 は傑作で

女さんのねられない痛手が泌 人 倍力を盡され た 機 見 7

して、

好

V

本社々報「高臺より」を發

定でゐる。 評を得た次號は五日頃に出す 同人間に配布したが、

東京 十九度と関つて校了に急いだ。 と思ふが、 で本號には多少疏漏の點がある く平熱にとり戻したが、 くれた、 する。 兎も角も本號は病床で苦熱三 郎君も僕の傍で徹夜をして 出發をせ 雜誌の出來上る頃に漸 何分の御了察をお ねばならぬ有様 直ちに

さを示してゐるの でも雑筆位は書けると云ふ力强

▼川柳二十

日會 の形となり、

は路郎師と僕

務打合

賞

#### (素) 々人の係關社誌雜柳川

今光西大塗松御鶴天御松 耀條鐵 青江池町王旅山 支支 支支支 支支支支 部會部部部部部部部部 大大爱大 大松大大大大松 阪 阪 媛 阪 阪 江 阪 阪 阪 阪 山 市市縣市市市市市市市市 幹幹幹幹幹幹幹幹幹 事事事事事事事事事事 市增荒植熊奈西宫須生石 場位井山谷井、岡崎田丸 沒勇英九 柳わ白豆翠晴 子子夫天紅人を峰秋夢朗

> 十市簸竹伯新光今玉 三岡川 笑治造 居 支 支支 支支 部 會部部 大高 島取媛阪治阪 阪阪 滕縣市市市 市市 幹幹幹 事事事 事 平 町三高永會清 藤 田 鸭 橋 牧春大承美白里宵友 人光朗春笑羽九明帆

淺赤穎藤藤國長長長田嘉笠片岡大長池助田井原平村枝野岡崎中納原岡本道谷澤明清退之 史晴太柳辰 路直一弘一樂一司藏助作郎濱郎秀二純生方平維徹居

前前安窪谷田米川川龜小岡大大大島伊員末田川田脇村村村上井川田西谷島山藤 久銀 孝あ 三 長五 嚴 五雀流波素之ん花太晟 面三花濤一彦 太 健郎美樓文介馬菱郎修武子郎村明步造 郎

東大大新西西西長原市石岩 森小藤軽篠柴食 野西鶴見村村 谷 場曾崎 人 林里子原谷満 世 い川 没根 禿八喜間明山わ三史食民柳 東浪好省春二南 山歩由晉珠月を汀風子郎路 魚人古二雨郎北

北眞青明阿江後近朝福松熊村中中立吉吉岡丘 山田木石形 戸 藤藤田田下谷松澤西井川田田 小 お登 啞 水菜遊 郎捐呂灰杉る兒勇水峰子紅裡水む坊人車人舟

同

- 67 -

同

JII

柳

より

+

巻まで

本第一

卷

大各

丁世六十

社員錢錢

阪

市

製並

本

賣

#### **取四東每** 水六京月 八豊一 判 所 鳥日 )川 區發號 雜柳田 誌き本部十社や町廿製 非り二五五頁 務吟ノ錢 所社一

Ti. 十いなで社

綴

1111

金拾

(送料共)

さはり本

ベ頒規

150

此致投

用し句

等を を なす、 を か

使投左

用句の

御

1

込

は

本

社

事

切

用

\$

可

切手代

大投賞項用の阪吟品と紙他 明

麻市所 新記製作 発事へを一 化生出 粧路涌 旬 ガ募月 新郎三 海 謝 H 聞氏 を 11 呈 粧 社宛 切 す 柳

題 一芝居 賞 二川

キる十路集 郎 締氏 選 大領 川雜 阪日一大 柳吟 家

雜

笙

を

天

Ш ○るお制投柳 つヶ月五十二 行報をお讀 ず 雜 鄭稅共六十五 い出宛沙

朝必丁阪 を川目市 お柳均王 受み記位寺 讀の 下事行區 きが柳上

る

3

条内、柳書優ケ、その也 原金切手件用司ン 三行金五十録、一件増する 內

加上

ら御社 せ申句 申越 會 I: 3 まれ内 ばる + 型 其 0 方 0 都 は 慶 tr. ≉ 記

六阪 住 吉 IA. 住 吉 町

下に通 発

用掛春筆生先郎路

册短●物小●額横●軸掛

(金前) 圓拾額 • 圓拾貳入函軸 圓參 册短 圓五 物小

日五十月二十切締込申

部理代社誌雜柳川

3

0

發行 111 同見 京 封本 1 梨 所 柳 thi 左希 は + 初 色 研 あ

E 記 望 4 4. C J. 者 U は 者 111 186 は 主 絕 本 ~ 1: せ劉 0 鏠 んに見 入 研 門 條 切 町 手 逃 欄 究 + しを欄 Æi. 枚 社

III J. 锤 人人即 [11] 主 發 行

誌 -4 創 年年册 作 金金金 :--# 圓圓錢

南電 朝 を 无話 選 の募 報四市 花南 報 係 者 1 街六 柳 游七 歡 用 廓。 壇 迎紙 位 事\_ ガ 汀 務= 秃 丰 所七山 柳

> ま版 す告

> 皇申

鏠

以

F

0

-UJ

用

44

3

年 賀 廣 告 を 慕

3

込期限 简 7 單に願ひます。 \$ 申 金 込 十二月十 N 0 下 3 員 年 號 П

分

原稿は

嚴

守

幾

П

を 御 替大阪社 利 用 左支ありませ用の上前金 K 七事 揭 0 五務 で ん願♀ 番所

111

#### 投 稿 規 定

▲「川柳塔」への投句 ▲投句は總て葉書又 ▲「近作柳樽」は全作 家の雜吟を募る。 種各題必ず別紙に は同型の厚紙に各 を明記する事の め、 住所氏名雅

▲文章は二十字詰原 ▲各地會報は半紙判 原稿紙に清記の事 は同人に限る。

一締切は嚴守された 一書體はなるべく階 書「川柳雜誌原稿」 と封筒に朱記の事 稿紙使用の事。

毎

號

▲投稿其他につき御 Lo 封入の事。 答はすべて返信

#### 募

集

#### 卷 號 課 題

第

+

Ė

第

松の 付 內 月 五日締切 增 麻 (各題十 位 生. 句以 汀 葭 內 柳選

乃選

十三卷第二 一號課 題

第

紋

十二月五日締切 (各題十 句以 内

帶 室 朝 田 新 柳 水選 秀選

無

病

世

各地柳壇(會報 近作柳樽(舞等)麻 生 路

郎

選

事

務

所

文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社 務

切

は事

務所宛

載 轉

京

店書捌賣

價

定

壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢 部 金泰 拾

金器 料告廣

一報下さいますれば ては事務所へ直接御 では事務所へ直接御 相談に 應じ ます。

御通 に前金切 便を差立 實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます 何月號よりと御指 (一年分)には定價の外に手數料十錢を申し受けます 知 送 願 金 ひます てますが御不在中にでも預ける様に願ひます、 の印ある時は直に は 振 U 川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記 座大阪七 柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない 1手 數料 十錢を申し受けます ▲御注文には中にでも預ける様に願ひます、但集金郵便に御送金を願ひます▲御希望により集金郵はは送本によつて御承知願ひます▲送本封紙を七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確

昭 和 + 年 + H 11 Ŧi. H EP

刷

昭 和 + 年 月 H 一發行

(毎月一次

[11]

發

日第

行號

卷

+

發 編 輯 飨 發 行大阪 及行印刷人 市西成 成區玉 區玉出 H 柳 雜 計 本 ·通三丁目三六番 二地 地

阪 iff 11 天王 寺 區上 沙 沙町一丁目五一番地 郷 雜 誌 七九番社

市 蒲 區 女 雜塚振電云性 雅誌東京支計 場町一三七 振替大阪七五〇五〇米 社

都) 三宅 (名古屋)靜觀堂 伊國屋 ぎょ三味堂 (神戸) 米田・伊國屋 ぎょ三味堂 (神戸) 米田・ 都) 三 支 社東 やよっ吉岡さ 田 明文堂 寶文館 書店其 血 ある玉森堂 共他 市内 各書 函館)石 市內 全書店 京紀

#### 眞

寫

下されば直ちに参上いたします Ш 一張撮影は遠近に抱らず お電話を

I. 藤

電話 土佐堀 五 五 五 〇 番(肥後橋南詰昭和通西南側) 大阪市西區土佐堀船町 清 寫 五五〇番 眞 四四 館

#### 家 傳

黄 華

膓、神經痛 藥價

七三日分分

式員

十十錢錢

リョウマチ、ぜんそく 膜、 治 胃 効 能 發賣元 (軟膏)

主

電話(94)直 東三野町五九 

琴福貴で呑んだがほめる鹽昆布

カ

寶 大 ייי 種

琴 南 地

喜

電

話

南

五

六

宗

右

衞

門

町

阪 徽 上 六 章旗

川

柳 雜

誌

証

指

定

加 藤 旗

徽 章

店

### 喫 ・フル

平野屋フルー

平

大阪難波驛前 屋

電 物店

ツパ

1

ラー

南五七九七

# 安建の地名

片瀬医学博士述「安産のために」 進呈



元 売 發 店商助卯田和 町修道 阪大



包装 一〇〇瓦 二五〇瓦 五〇〇瓦 二瓦

大正十三年三月三日第三陸帰便物記可(毎月日川一日養行)

1

(第一四二號)

完 賈 金 答 合 錢

会科壹钱

疾患の濕布料さして汎く賞用せらる等)發熱性(感胃、肺炎、肋膜炎等)

3

EF2020(O)

御注意 近時類似粗悪品多數あり御購入の際には必ず